

山梨県南アルプス市
Sakanoueubagami dai 2 chiten
坂ノ上姥神遺跡 第2地点

南アルプス子どもの村小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011. 3

学校法人さきのくに子どもの村学園
南アルプス市教育委員会

山梨県南アルプス市
Sakanoueubagami dai 2 chiten
坂ノ上姥神遺跡 第2地点

南アルプス子どもの村小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011. 3
学校法人きのくに子どもの村学園
南アルプス市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、山梨県南アルプス市徳永 1717、1718、1720-1、1720-2 に計画された南アルプス子どもの村小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本発掘の調査主体は南アルプス市教育委員会であり、調査は斎藤秀樹（南アルプス市教育委員会文化財課）が担当した。
3. 発掘調査期間は平成 21 年 6 月 29 日～7 月 16 日、整理作業期間は平成 21 年 7 月 17 日～7 月 31 日および平成 22 年 12 月 1 日～平成 23 年 3 月 30 日である。
4. 平成 15 年度、宅地造成工事に伴い坂ノ上姥神遺跡の発掘調査が実施された。よって今回の調査地点を「坂ノ上姥神遺跡第 2 地点」と呼称することとした。
5. 本書の執筆・編集は斎藤が行った。
6. 調査で得られた出土遺物およびすべての記録は、南アルプス市教育委員会に保管している。
7. 試掘調査から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。（敬称略・五十音順）
植月 学、平野 修、株式会社小澤建築工房、山梨県立博物館、山梨県埋蔵文化財センター

凡　　例

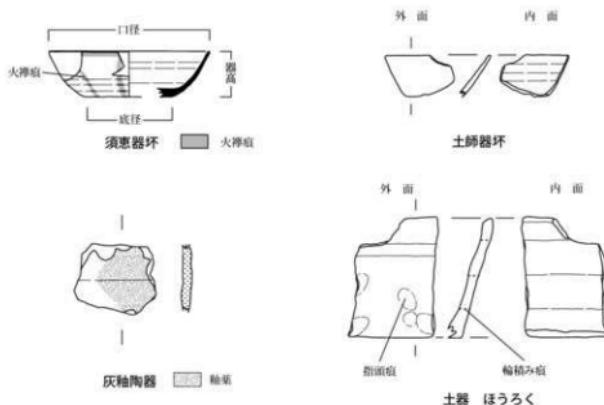
1. 遺構および遺物の実測図の縮尺は、それぞれ図に明記しているが、原則として以下のとおりである。

(1) 遺構	住居址	1/40
	竈	1/20
	土坑群	1/40
	溝状遺構	1/40
(2) 遺物	土器	1/3
	鉄製品	2/3

2. 遺構図中で使用したスクリーントーンおよび遺物分布図におけるドットの凡例は挿図中に示した。

3. 遺構断面図、エレベーション図における数値表示は標高を表す。

4. 土器の実測図の表現は、以下のとおりである。破片資料の場合、断面図の右側に内面を、左側に外面を描き表現した。



5. 挿図中の遺物番号、遺物観察表、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

目 次

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理作業の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
1. 御勅使川と御勅使川扇状地	
2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の地形	
第2節 歴史的環境	4
1. 御勅使川扇状地北部の歴史環境	
2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の調査事例	
第Ⅲ章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1. 竪穴住居址	
2. 溝状遺構	
3. 土坑	
第Ⅳ章 理科学的分析	27
第1節 坂ノ上姥神遺跡第2地点および第3地点の炭化種実同定	27
第2節 坂ノ上姥神遺跡第2地点から出土した動物遺体	32
第Ⅴ章 総括	34
第1節 竪穴住居址	34
第2節 溝状遺構	36
第3節 遺跡の広がりと時期変遷	36
第4節 調査の成果と課題	38
写真図版	

挿 図 目 次

- 第1図 開発計画図および遺構の保存範囲 (1/1,000)
第2図 御動使川扇状地地形分類図および遺跡分布図 (1/25,000)
第3図 坂ノ上姥神遺跡第2地点および周辺の遺跡と調査地点 (1/2,500)
第4図 基本層序柱状図 (1/20)
第5図 坂ノ上姥神遺跡第2地点全体図 (1/250)
第6図 1号住居址平・断面図 (1/40)
第7図 1号住居址竪平・断面図およびエレベーション図 (1/20)
第8図 C 2～G 2 平面図、1～3号溝・19号土坑断面図およびエレベーション図 (1/40)
第9図 G 2～I 2・H 3～I 3 平面図、3号溝・28・29号土坑断面図およびエレベーション図 (1/40)
第10図 I 2～L 2・I 3～L 3 平面図、3号溝・34・41・44号土坑断面図およびエレベーション図 (1/40)
第11図 1号住居址、1～3号溝出土遺物 (1/2・2/3)
第12図 19・34号土坑出土遺物 (1/3)
第13図 坂ノ上姥神遺跡検出された竪穴住居址および溝状遺構 (1/1,000)
第14図 坂ノ上姥神遺跡周辺の遺跡変遷 (1/4,000)

表 目 次

- 第1表 土坑計測表 (第8・9・10図)
第2表 土器観察表 (第11・12図)
第3表 鉄製品観察表 (第11図)
第4表 坂ノ上姥神遺跡および周辺の遺跡検出竪穴住居址一覧

写真図版目次

- 写真図版 1
1. 調査区全景 (北から)
2. 調査区全景 (南から)
3. 1号住居址 (南から)
4. 1号住居址 (西から)
- 写真図版 2
1. 1号住居址竪 (南から)
2. 1号住居址竪掘方 (南から)
3. 1・2号溝 (北から)
4. 1～3号溝 (南から)
- 写真図版 3
1. 1・2号溝 (南から)
2. 2号溝遺物出土状況 (北から)
3. 3号溝 (南から)
4. 3号溝全景 (北から)
- 写真図版 4
1. 18・19号土坑
2. 34号土坑遺物出土状況 (西から)
3. 調査風景
4. 調査風景
5. 調査風景 (小学校発掘体験)
6. 調査風景 (小学校発掘体験)
- 写真図版 5
1. 1号住居址、1・2号溝出土遺物
- 写真図版 6
1. 2・3号溝出土遺物
- 写真図版 7
1. 3号溝、19・34号土坑出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年4月15日、南アルプス市教育委員会(以下市教委)は、学校法人きのくに子どもの村学園(以下工事主体者)から南アルプス市徳永1717他に計画された南アルプス子どもの村小学校建設予定区域について、埋蔵文化財包蔵地の照会を受けた。照会地は南アルプス市周知の埋蔵文化財包蔵地の「坂ノ上姥神遺跡(遺跡番号 HT-40)」に該当する。市教委と工事主体者および土地所有者との協議の結果、土地所有者から依頼を受け、市教委が試掘・確認調査を実施することが決定した。

試掘調査は平成20年6月2日に着手し、平成20年6月7日に埋め戻しを行って完了した。試掘調査時点では果樹栽培が行われていたため、果樹を避けてトレーナーを6本設定した。調査の結果、すべてのトレーナーで平安時代と推測される遺構や遺物が発見され、遺構の濃密な分布状況が明らかとなった。

調査結果を基に、市教委と工事主体者が遺跡の保護について協議を重ね、最終的に工事主体者が山梨県教育委員会の定める遺跡までの保護層を確保する造成および建物の設計とし、遺跡を埋設保存することで合意した。その後工事区域北および西側への側溝の設置および工事区域西側の南北に走る道路の拡幅工事が新たに計画された。この段階で、私立小学校の造成および建物の設計がほぼ決定されたため、平成20年10月24日付で工事主体者から市教委を経由して、文化財保護法93条に基づく書類の届出があり、平成20年11月17日付け、教学文第2119号にて山梨県教育委員会から工事主体者へ試掘・確認調査の実施について通知がなされた。

このため、平成20年11月19日、再度試掘調査に着手し、同年12月11日に調査を終了した。調査の結果、平安時代から中世と推測される遺構・遺物が発見されたため、市教委、工事主体者で協議した結果、工事主体者の負担により西側道路拡幅区域について埋蔵文化財の記録保存として発掘調査を実施することで合意した。

平成21年5月20日付で市教委は工事主体者と発掘調査の委託契約を締結し、平成21年6月29日に発掘調査に着手した。



調査前の状況



第1図 開発計画図および遺構の保存範囲 (1/1,000)

第2節 発掘作業の経過

平成21年

- 6月29日（月） 曇り 重機による表土掘削。遺構確認。
- 6月30日（火） 曇り 重機による表土掘削。遺構確認。
- 7月1日（水） 曇り 1、2号溝状遺構発掘に着手。
- 7月2日（木） 雨のち曇り 1、2号溝状遺構発掘。
- 7月3日（金） 雲り 1、2号溝状遺構完掘。3号溝状遺構発掘に着手。
- 7月6日（月） 雨 雨のため作業中止。
- 7月7日（火） 晴れ 1、2号溝状遺構全景写真。平面図作成。
- 7月8日（水） 曇り 1、2号溝状遺構平面図作成。3号溝状遺構発掘。
- 7月9日（木） 曇り 3号溝状遺構発掘。芦安小学校体験発掘調査。
- 7月10日（金） 晴れ 3号溝状遺構完掘。
- 7月13日（月） 晴れ 3号溝状遺構平面図作成。1号住居址発掘に着手。
- 7月14日（火） 晴れ 1号住居址発掘。
- 7月15日（水） 晴れ 調査区および1号住居址全景撮影。
- 7月16日（木） 晴れ 1号住居址完掘および平・断面図作成。調査終了。機材撤去。

調査主体 南アルプス市教育委員会

調査担当者 斎藤秀樹

作業員 市ノ瀬政次、小林素子、桜井理恵、中澤 保、名取 茂、山村隼人

第3節 整理作業の経過

整理作業は平成21年7月17日から7月31日まで土器の洗浄および注記までを行い、他の整理作業については平成22年度に実施した。平成22年度は12月1日から開始し、遺物の実測・トレース・写真撮影、遺構図や地図の作成、報告書の編集を行い、平成23年3月30日の報告書刊行をもって終了した。

整理作業主体 南アルプス市教育委員会

整理作業担当者 斎藤秀樹

整理作業員 市ノ瀬政次、小林素子、桜井理恵、中澤 保、名取 茂、穂坂美佐子、山村隼人
出土炭化種実同定委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

出土動物遺体分析委託 植月 学（山梨県立博物館）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

1. 御勅使川と御勅使川扇状地

南アルプス市の北端を流れる御勅使川は、巨摩山地のドノコヤ峠（約1,518m）の東麓に源を発し、山地を流下して塙前付近で平地に入り、市の北側を東流して釜無川に合流する、総延長18.78kmの河川である。古くから暴れ川として有名で、巨摩山地の山々を割りながら大量の砂礫を下流へ供給し、甲府盆地西部に東西約7.5km、南北約10km、面積約49km²にわたる御勅使川扇状地を形成している。坂ノ上姥神遺跡はこの扇状地の扇端部に立地している。

扇状地は地表の主体が砂礫のため地下水位が低く、水の乏しい乾燥した土地となる。御勅使川扇状地の扇央部に位置する上八田・西野・在家塚・上今井・桃園・吉田・小笠原の集落は、近世から「原七郷」と呼ばれ、「お月夜でも焼ける」と言われるほどの常襲早魃地域であった。そのため近世での主な生業は木綿や煙草、柿などの畑作が主体で、こうした作物を行商で売る生活様式がこの地域の特徴となっていた。昭和40年代に入ると徳島堰（寛文11年に完成した灌漑水路）の水を利用した畑かんの整備が進み、現在は水はけのよい土地であることをを利用してブドウやモモ、サクランボなど果樹栽培が盛んな地域となっている。

こうした扇状地を造りだした御勅使川は、現在でこそ河道が固定されているが、過去に何度も流路の変更を繰り返してきた。現在南アルプス市北部を東西に走る県道甲斐青安線が、明治30年まで御勅使川の流路であったことは広く知られている。かつてのこの流路は、地元で「前御勅使川」と呼ばれ、昭和に入り「四間道路」が整備され、その後高度経済成長期の開発の波をうけるまでは県道沿いに旧堤防が残り、付近には家屋も少ないという河川としての面影を色濃く残していた。この前御勅使川は遺跡の分布状況や庄名の研究等から、戦国時代にはすでに流れていることが確実視されている。^(註1) 流路上には、運搬されてきた砂礫によって浸食崖が埋め立てられ、下流に小扇状地が形成されており、一定期間、御勅使川の本流であったことがうかがえる（第2図）。

前御勅使川以前の流路については、1969年に刊行された『白根町誌』で有野から西野を経由し現在の白根高校付近に至るルートがすでに図示されている。1990年代に入ると市内を南北に貫く中部横断自動車道に伴う試掘調査や航空写真からの研究によって科学的な証拠が提示され、現在では流路の具体的なルートがわかりつつある。^(註2) また、百々地区に位置する百々遺跡の発掘調査から、この流路は平安時代から中世にかけて本流があったと推測されており、「御勅使川南流路」と名付けられている。^(註3) 巨視的に見れば、坂ノ上姥神遺跡は前御勅使川と御勅使川南流路の間に立地している。

2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の地形

御勅使川扇状地扇端部に立地する坂ノ上姥神遺跡周辺の地形は、扇状地にそって緩やかに東側に傾斜している。調査地点の西端は標高313.9m、東端は312.5mを数え、比高差1.4mを測る。遺跡の東端は、御勅使川扇状地を釜無川が浸食して形成した崖が南北に走り、遺跡の立地する崖上と崖下の比高差は約10mに及ぶ。ただし県営圃地東側の崖線は、開発によって西側へ掘削されたものであり、本来の崖線はやや東側を走っていたと考えられる（図3）。

遺跡の北側は御勅使川の支流によって形成されたと推測される深い谷が東西に走っている。一方、南

側約360mの付近でも御勅使川の支流の痕跡が見られ、浸食崖を削る浅い沢が形成されている。崖下の低地上にはそれぞれの支流によって造られた複数の小扇状地が形成されている。

第2節 歴史的環境

1. 御勅使川扇状地北部の歴史環境

本遺跡（1）が位置する御勅使川扇状地北部地域の歴史環境について時代を追いながら見ていきたい（第2図）。

最も古い遺跡として、縄文時代中期の遺物が採取された赤山遺跡（2）があげられる。赤山遺跡は葦崎から続く竜岡台地の南端である赤山に位置している。縄文時代後期では、上八田堂前遺跡（3）や上八田下村遺跡（4）、徳永・御崎遺跡（5）、百々・上八田遺跡（6）が徳永、上八田両地区の浸食崖上に立地し、各遺跡からは、敷石住居址や配石遺構が発見されており、扇状地扇端部へも集落が進出した形跡が認められる。縄文晩期～弥生時代中期では、扇状地扇端部から扇央部までの地域に遺跡が確認できる。野牛島地区の大塚遺跡（7）や石橋北屋敷遺跡（8）、立石下遺跡（9）では条痕文土器とともに弥生時代中期から後期の土器片が検出されている。また、扇央部に位置する横堀遺跡（10）でも縄文時代晚期から弥生時代前期の土器や石器が発見されている。

古墳時代前期では、大塚遺跡で竪穴住居址が6軒検出され、榎原・天神遺跡（11）では前期の高環を伴う畝状遺構が発見されている。後期では扇状地扇端部に立地する徳永・御崎遺跡第2地点（5）で竪穴住居址が1軒発見されており、数が少ないながらも扇状地扇端部に後期集落が存在したことが明らかとなった。一方、御勅使川南流路の南、上今諏訪地区的御勅使川扇状地扇端部には後期古墳のおつき穴古墳（12）がある。現在は1基のみが確認されているだけだが、本来は群集墳であったと考えられる。

古代に入ると遺跡数は増加し、集落範囲も拡大する傾向となる。奈良時代8世紀初頭から平安時代9世紀中頃にかけて、野牛島地区に遺跡が集中し、大塚遺跡や野牛島・大塚遺跡（13）、立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡、野牛島・西ノ久保遺跡（14）で集落跡が検出されている。扇状地扇端部に目を移すと、坂ノ上姫神遺跡で8世紀代から9世紀の竪穴住居址が発見されている。こうした遺跡の分布から、8世紀代では、野牛島地区および徳永地区の扇状地扇端部に集落が営まれた傾向がわかる。

9世紀から10世紀に入ると状況は変化を見せる。野牛島地区では、検出された竪穴住居址が9世紀中頃から減少する一方で、前御勅使川を挟んだ南側の百々遺跡（15）では、9世紀初頭から集落が形成され、9～10世紀代を中心とした奈良・平安時代の竪穴住居址が250軒以上発見されたほか、鍾や石帶など公的機関の存在を示す遺物や、牧の存在を示唆する牛馬の獣骨などが88個体以上検出され、役所を基盤とした拠点的な集落が存在したと考えられている。前御勅使川右岸に位置する榎原・天神遺跡でも10世紀代の竪穴住居址が検出されている。また、百々遺跡の東側には平安時代創建の伝承をもち、平安時代中期の十一面觀音立像を本尊とする真言宗の長谷寺が立地している。以上の状況から、9世紀に入ると前御勅使川右岸扇央部の百々地区から扇端部の上八田地区にわたる広い範囲にいくつかの集落が展開したと推測される。

中世で代表される遺跡は石橋北屋敷遺跡である。13～16世紀の遺構が検出されており、竪穴住居址や掘立柱建物址、両側に側溝をもつ幅4mの道路跡やそれに直交する区画溝など、計画的な土地利用の状況がうかがうことができる。同遺跡では16世紀後半の土坑墓も多数発見されており、この時期に墓地化したと推測されている。能蔵池の西端に位置する野牛島・大塚遺跡第2地点（13）でも中世の

区画溝、土坑墓が検出されており、古代と比べ集落の中心が現在「古屋敷」や「北屋敷」と呼ばれる能蔵池北西部へと移動している可能性が指摘できる。

一方、石橋北屋敷遺跡と御勅使川旧流路上に位置する仲田遺跡⁽¹⁶⁾では、中世から近世までの水田床土層が砂礫層と互層で何層も発見されており、戦国時代から現代まで継続的に水田耕作が営まれていたことが明らかとなっている。

こうした集落遺跡や生産遺跡のほかに、御勅使川、前御勅使川、釜無川沿いには堤防をはじめとする治水施設が築かれてきた。その中で、釜無川沿いでは上高砂地区に位置する壱番下堤跡⁽¹⁷⁾で近世の堤防跡が発見され、さらに南に位置する徳永地区と下高砂地区では天保8年に築堤された百間堤⁽¹⁸⁾と呼ばれる堤防の調査が行われている。また武田信玄築堤の伝承をもつ石積出四番堤⁽¹⁹⁾や六科特棋頭⁽²⁰⁾の調査では、根固めに「梯子土台」や「木工沈床」を用いた遺構が検出され、現在の遺構が明治大正期に改修されたものであることが明らかにされている。

2. 坂ノ上姥神遺跡周辺の調査事例

坂ノ上姥神遺跡周辺は南アルプス市の中でも遺跡が集中している地域である。遺跡が立地する御勅使川扇状地扇端部は、供給される御勅使川の土砂の堆積が少なく、遺構確認面は扇央部と比較して非常に浅い。そのため地表に露頭する遺物も多く、その結果、発見される遺跡も広範囲なものとなっている。

遺跡周辺で確認された最も古い遺構は縄文時代後期の集落跡である。まず旧白根町時代の昭和47年10月、上八田下村遺跡でふどう棚と給水管の設置工事に伴い、地表下80cmの地点から敷石や焼土、土器片が検出された。ここから東へ約70mの地点に位置する上八田堂前遺跡でも昭和59年9月、サクランボ畠の掘削に伴う調査によって、地表下約50cmの地点から、中に安山岩の転石37個と花崗岩1個が敷きつめられた直径3.4mを測るほぼ円形の配石遺構が発見され、縄文時代後期の集落跡の存在が示唆された。平成12年には、上八田堂前遺跡から東へ約170m地点に位置する徳永・御崎遺跡で、旧八田村教育委員会によって集合住宅浄化槽部分の調査が実施され、縄文時代後期の配石遺構が検出された。平成15年に6町村が合併して南アルプス市が誕生し、平成16年に市教育委員会によって南に隣接する徳永・御崎遺跡第3地点の調査が行われ、同時期の敷石住居址が発見されている。平成17年には上八田堂前遺跡の北側、百々・上八田遺跡（上八田1557地点）で、個人住宅の浄化槽設置に伴い同教育委員会によって縄文時代後期初頭の敷石住居址が検出され、それが跡からタイの第2椎骨を検出している。その骨は現時点で山梨県において海産魚を食料としたことを示す最古級の資料となっている。

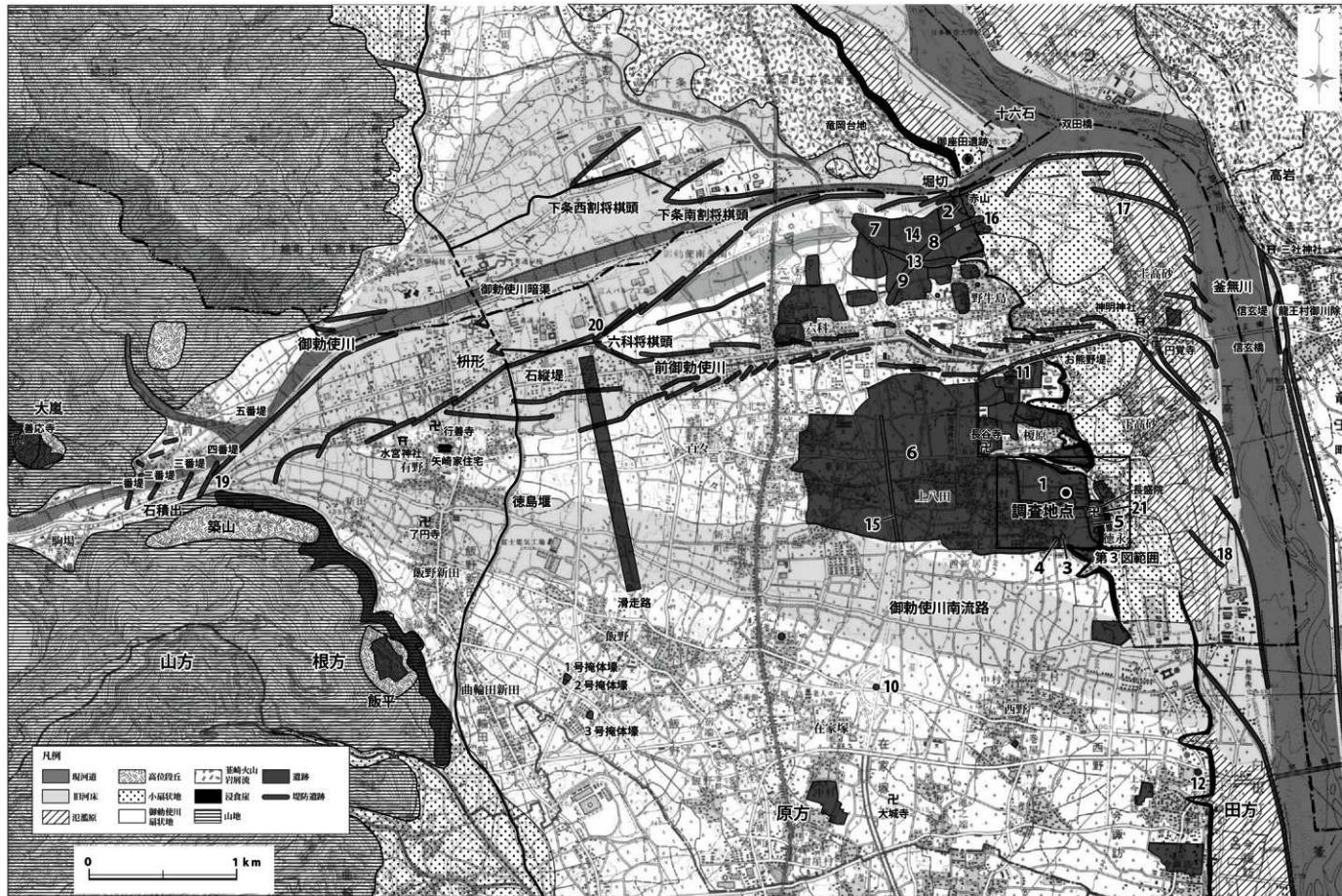
古墳時代後期では、徳永・御崎遺跡第2地点で竪穴住居址が発見されている。本遺跡から南南東に約2km地点には後期古墳であるおつき穴古墳が立地しており、調査地点周辺に古墳時代後期の集落が広がっていたと推測される。

奈良・平安時代になると発見される遺構数が急増し、坂ノ上姥神遺跡、徳永・御崎遺跡、百々・上八田遺跡で竪穴住居址が検出されている。平成15年に行われた坂ノ上姥神遺跡の発掘調査では、奈良・平安時代の竪穴住居址が5軒発見されている。

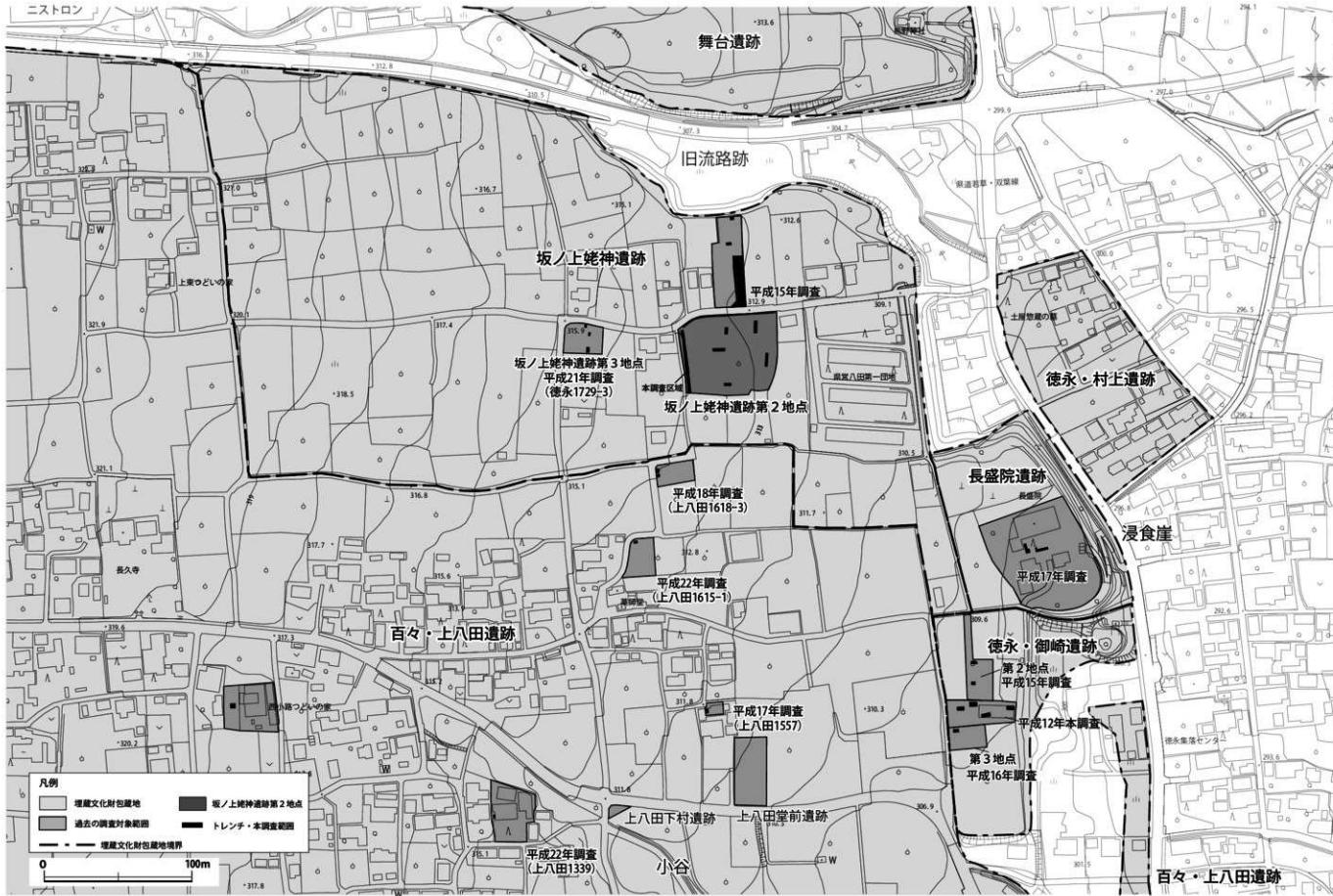
本遺跡南東側に隣接する長盛院遺跡⁽²¹⁾は、縄文時代後期の遺跡であるとともに、中世武田家に仕えていた金丸氏の館跡で、後に武田24将にも數えられた土屋右衛門尉正統や天目山で武田勝頼に従い討ち死にした土屋惣蔵正恒の生家でもある。館跡が立地する場所は東側に浸食崖が走る自然の要害で、本来は北・西・南側に土塁が築かれていたが、現在では虎口を伴う西側の土塁のみが残されている。

註

- (註1) 煙 大介 1997 「御勤使川の流路変更に関する一視点」『帝京大学文化財研究所報』第31号
- (註2) 保坂康夫 1999 「御勤使川扇状地の古地形と道跡立地—中部横断道の試掘調査の成果から—」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 2002 「御勤使川の流路変遷にかかる最近の考古学的知見」『甲斐路』第100号
- (註3) 今福利忠他 2004 「百々道跡3・5」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第213集 山梨県教育委員会他
- (註4) 白根町教育委員会 1983 『白根町の文化財案内』
- (註5) 白根町埋蔵文化財包蔵地カード
- (註6) 八田村教育委員会 2002 「赤木・御崎道路」八田村文化財調査報告書 第4集
- (註7) 南アルプス市教育委員会 2005 「平成15・16年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第10集
- (註8) 上八田堂前道跡、上八田下村道跡、百々道跡は旧白根町時代に発掘調査が行われた道跡である。平成15年6町村合併後、南アルプス市で実施した道跡分布調査の結果、3道跡を含めて周辺地域を「百々・上八田道跡」としたが、本節では発達地点を示すために旧道跡名で表記する。
- (註9) 山梨県教育委員会他 1997 「大塚道跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第137集
- (註10) 山梨県教育委員会他 2000 「石橋北屋敷道跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集
- (註11) 山梨県教育委員会他 2001 「立石下道跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第189集
- (註12) 山梨県教育委員会他 2001 「横觸道跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第184集
- (註13) 八田村教育委員会他 2001 「櫻原・天神道跡」八田村文化財調査報告書 第3集
- (註14) 同上
- (註15) 八田村教育委員会 2000 「野牛島・大塚道跡」八田村文化財調査報告書 第2集
- 山梨県教育委員会他 2003 「野牛島・大塚道跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第203集
- (註16) 南アルプス市教育委員会 2009 「野牛島・西ノ久保道跡1・II・IV区」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第19集
同 2009 「野牛島・西ノ久保道跡III・V・VI区」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- (註17) 山梨県教育委員会他 2002 「百々道跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第201集
同 2004 「百々道跡2・4」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第212集
同 2004 「百々道跡3・5」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第213集
同 2005 「百々道跡6」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第231集
- (註18) 山梨県教育委員会他 2001 「仲田道跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第189集
- (註19) 山梨県教育委員会他 2001 「岩倉下堤跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第190集
- (註20) 山梨県教育委員会他 2005 「笠置川堤防跡(堤防道跡No.23)」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第277集
- (註21) 南アルプス市教育委員会 2008 「石積出西番堤」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第16集
- (註22) 宮沢公雄他 1998 「群棋道遺跡・須須城址」白根町教育委員会
- 南アルプス市教育委員会 2009 「平成19年度埋蔵文化財試掘調査報告書・御勤使川堤防址群」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第22集
- (註23) 南アルプス市教育委員会 2006 「平成17年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第11集



第2図 御勤使川扇状地地形分類図および遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 坂ノ上姥神遺跡第2地点および周辺の遺跡と調査地点 (1/2,500)

第Ⅲ章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

試掘調査は、平成20年6月2日に着手し、当時耕作中の果樹および烟かんを回避できる場所に任意寸法のトレンチを6箇所(第1～6トレンチ)設定して調査を行い、地表下約40～65cmで豊穴住居址、溝状遺構、土坑を検出し、同月7日に埋め戻しを行って調査を完了した。試掘調査終了後、同年10月に設計の計画変更があり、工事区域北側の道路沿いへ側溝が敷設される計画となった。側溝は掘削幅が1m以下の狭小な工事のため立会調査としたが、平成20年11月19日の調査時に遺構を発見したため、記録保存のための緊急調査を実施した。

整理作業の段階で、6月2～7日までの試掘調査を一次調査、11月19日～12月11日までの調査を二次調査とし、二次調査における側溝部分の試掘溝を第7トレンチとした。なお、試掘調査時の遺構番号は第1トレンチ～第6トレンチまで通し番号とし、第7トレンチは別途遺構番号を付与した。本報告である平成21年度に実施した本調査区域も試掘調査とは別の遺構番号を付与している。なお、試掘調査結果については「南アルプス市埋蔵文化財試掘調査報告書第24集 平成20年度埋蔵文化財試掘調査報告書」に掲載した。

調査結果を基に遺跡の保存協議を行った結果、小学校校舎および寄宿舎部分は盛土保存することとし、敷地西側の道路の拡幅部分について本調査を実施することとした。

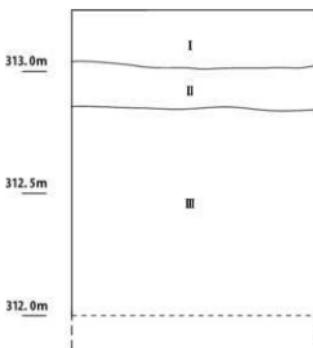
発掘調査は、小学校建設工事の工程の関係から工事とほぼ平行して実施することになり、平成21年6月29日に着手した。工事区域内への出入り口が発掘対象地区にあるため建設地内への車両の進入路を南端に確保して調査を実施し、北側の調査終了後一部を埋め戻して進入路を確保しつつ、調査区南側の調査を行った。

調査時には、調査範囲が狭いためグリッドを設定しなかったが、整理作業の段階で遺構の位置を整理するため、図面上で5m×5mの任意グリッドを設定した。南北には北からアルファベットを付与し、東西には西から番号を付与した(第5図)。

第2節 層序

遺跡の現況は果樹畠であった。調査区の基本層序は以下のとおりである。場所によっては第Ⅱ層が存在しない地点もある。

- 土層説明
- 第Ⅰ層 褐色土。表土。耕作土。
- 第Ⅱ層 暗褐色土。シルト。
- 第Ⅲ層 明褐色土。シルト。地山。



第4図 基本層序柱状図(1/20)

第3節 遺構と遺物

1. 穫穴住居址

1号住居址（第6・7・11図、第2表、写真図版1・2・5）

位置 J 3に位置する。

遺存 遺存状態は比較的良好で、確認面から床面まで約28～37cmを数える。

形状 東西部分が調査区域外に延びるため形状は不明であるが、方形のプランを呈すると推測される。

規模 南北軸は上端で約3.5m、下端で約3.3mを測る。

重複 3号溝状遺構に切られている。

床面 地山の明褐色粘土層を利用している。住居址ほぼ全体で硬化面を検出した。

壁溝 北壁と南壁で検出した。幅約10～15cm、深さ約4.5～7.2cmを測る。

竪 北壁に造られている。天井部および袖部は残存していない。地山を方形に例り貫いて造られている。竪内には焼上が堆積し、竪壁に被熱痕がみられた。

遺物 出土した遺物のほとんどは土器の小片であり、出土量も少ない。1は土師器の环の口縁で内外面の磨耗が激しい。2は須恵器甕の口縁部破片である。

時期 出土遺物は小片の土器を中心であるため時期の特定は難しいが、遺物の主体は土師器の环や甕であり、1および2から宮ノ前編年IV～V期、県史編年III～IV期、8世紀末から9世紀前半と推測される。

2. 溝状遺構

1号溝状遺構（第8・11図、第2表、写真図版2・3・5）

位置 C 2～E 2に位置する。

形状・規模 幅約1m、底面から確認面までの深さ約34cmを数える。2号溝状遺構とほぼ平行に南北に走り北から南へゆるやかに傾斜している。断面はすり鉢型を呈し、底面がやや平坦となる。

重複 2号溝状遺構に切られている。

遺物 いずれも覆土中から出土した。1は須恵器の甕の胴部破片で外面にタタキが施されている。

2は灰釉陶器で長頸壺の小片と推測される。図化できなかったが写真3・4・5は製塙（焼塙）土器の小片である。

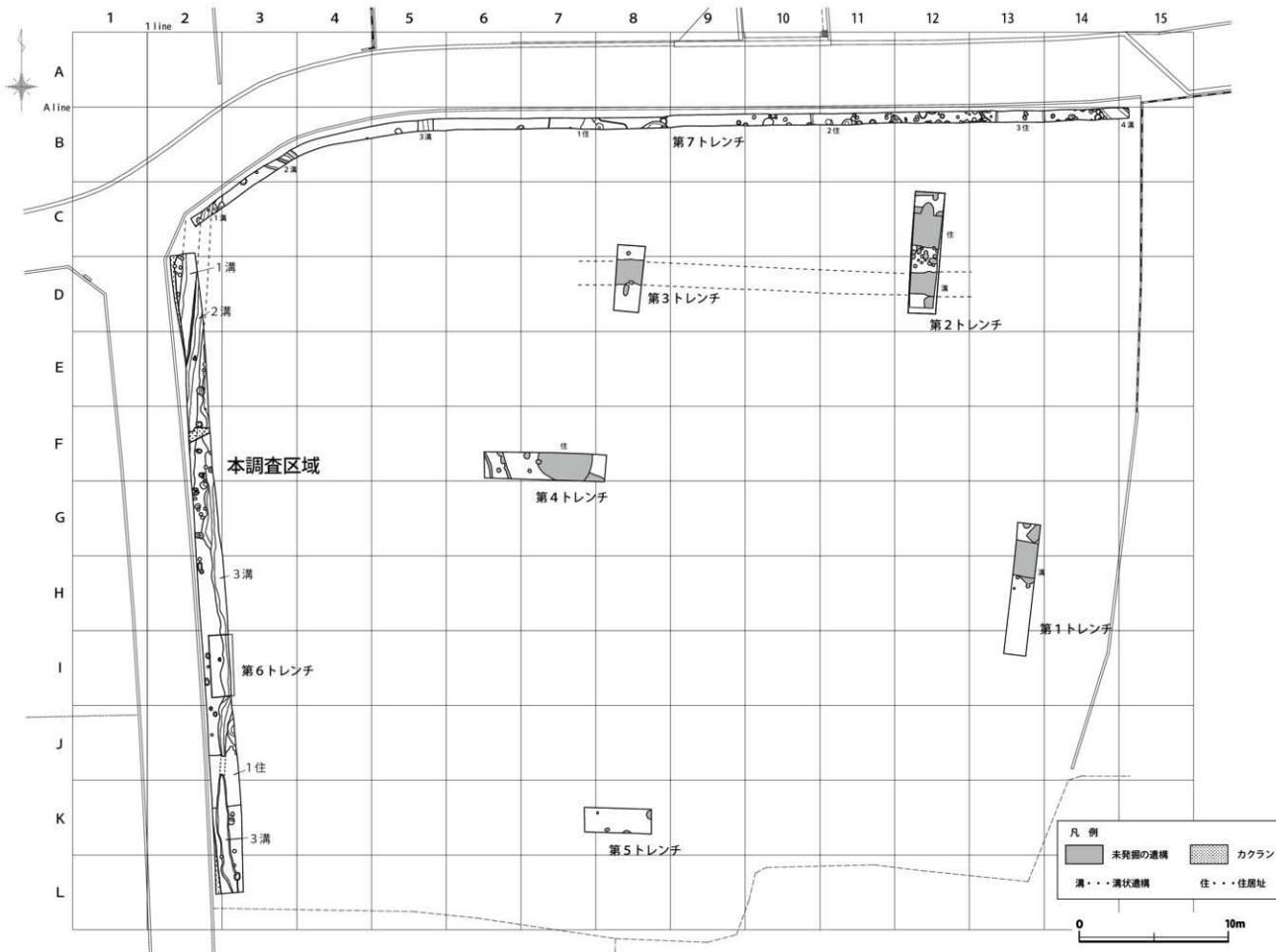
時期 出土遺物は土師器環や甕が主体で、須恵器の环や甕片および灰釉陶器片が少量出土した。中の遺物は出土していない。調査範囲が狭小なため断定はできないが、現時点では奈良・平安時代としておきたい。

2号溝状遺構（第8・11図、第2表、写真図版2・3・5・6）

位置 D 2～G 2に位置する。

形状・規模 幅約70～90cm、底面から確認面までの深さ約44cmを数える。1号溝状遺構とほぼ平行に南北に走り、北から南へゆるやかに傾斜している。断面はすり鉢型を呈し、底面がやや平坦となる。覆土は暗褐色土が主体である。

重複 1号溝状遺構を切って造られている。



第5図 坂ノ上姥神遺跡第2地点全体図 (1/250)

遺物 遺物は1は土師器の壺の口縁破片、2は土師器の壺底部破片、3は須恵器壺の底部で外面に火禪痕が見られる。4は須恵器の壺蓋の小片である。5は須恵器の長頸壺か壺Gの小片、6は中世のほうろくの破片である。また獸骨およびウマの歯が長径30cmの石とともに覆土中から出土した。

時期 出土遺物は土師器壺と甕が主体で、須恵器の壺や長頸壺も少量出土した。中世のほうろくや鍋片が出土している。以上から平安時代から16世紀頃までと推測される。

3号溝状遺構（第8・9・10・11図、第2・3表、写真図版2・3・6・7）

位置 D2～L3に位置する。

形状・規模 幅約80～90cm、底面から確認面までの深さ約20～24cmを数える。現在の区画とほぼ平行し、やや蛇行しながら南北に走り、北から南へゆるやかに傾斜している。断面はすり鉢型を呈し、底面がやや平坦となる。

重複 1号住居址を切って造られており、34号土坑に切られている。

遺物 遺物は1は須恵器の壺蓋の小片、2は須恵器の高台壺の底部破片、3、4、5は中世の鍋の破片、6は棒状鉄製品である。

時期 出土遺物は土師器壺や甕および須恵器の高台壺や甕に加え、中世の鍋片である。3号溝は宮ノ前IV～V期に比定される1号竪穴住居址を切って造られており、V期（9世紀初）以降から16世紀頃までと推測される。

3. 土坑（第8・9・10・12図、第1・2表、写真図版2・4・7）

34号土坑（第10・12図、第1・2表、写真図版4・7）

位置 J3に位置する。

形状・規模 調査区外へ伸びるため正確な形状は不明であるが、楕円形を呈すると推測される。確認面から床まで約32cmを測る。

重複 3号溝を切っている。

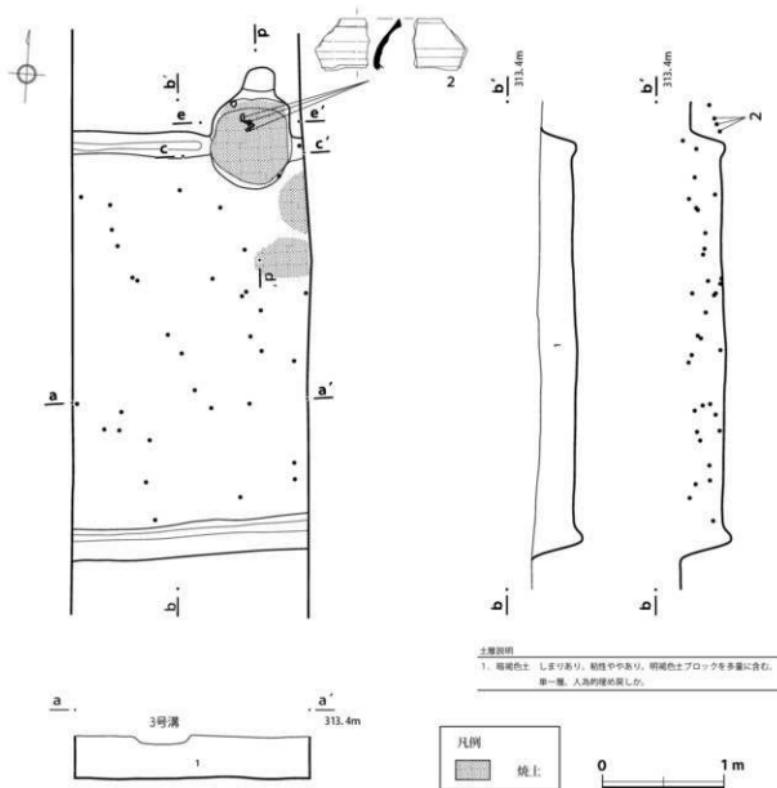
遺物 覆土中から1の内耳鍋の破片が出土した。

時期 1の内耳鍋から判断すれば、15世紀後半～16世紀前半と推測される。

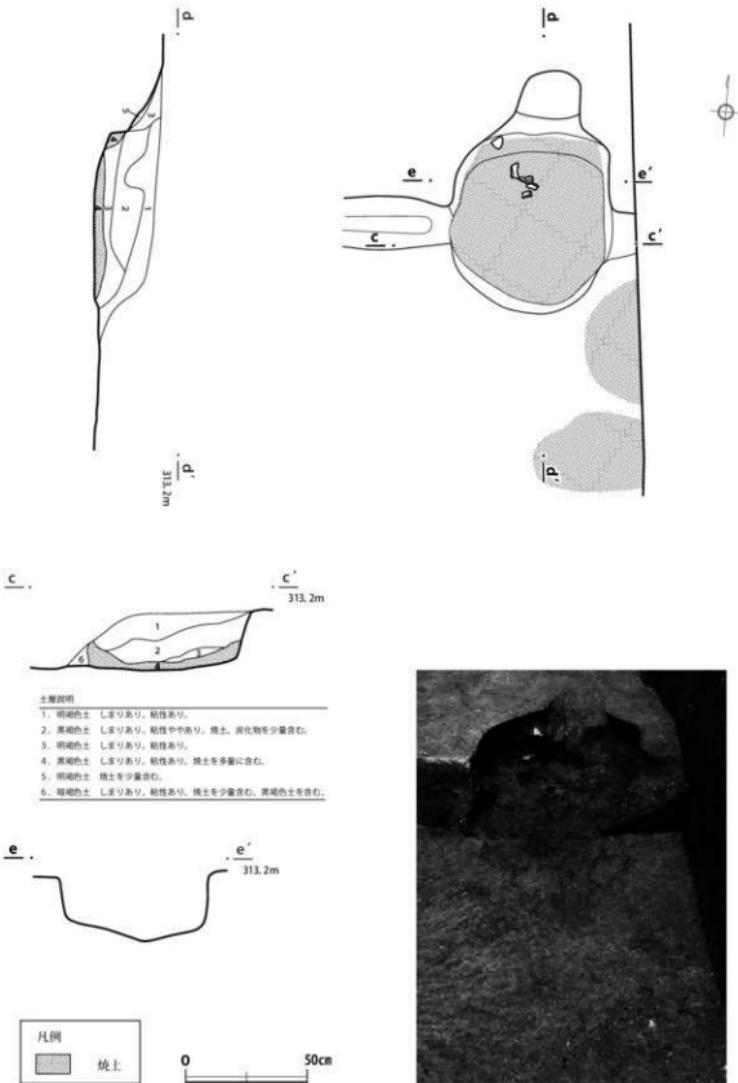
その他の土坑については土坑計測表を参照していただきたい。

第1表 土坑計測表（第8・9・10図）

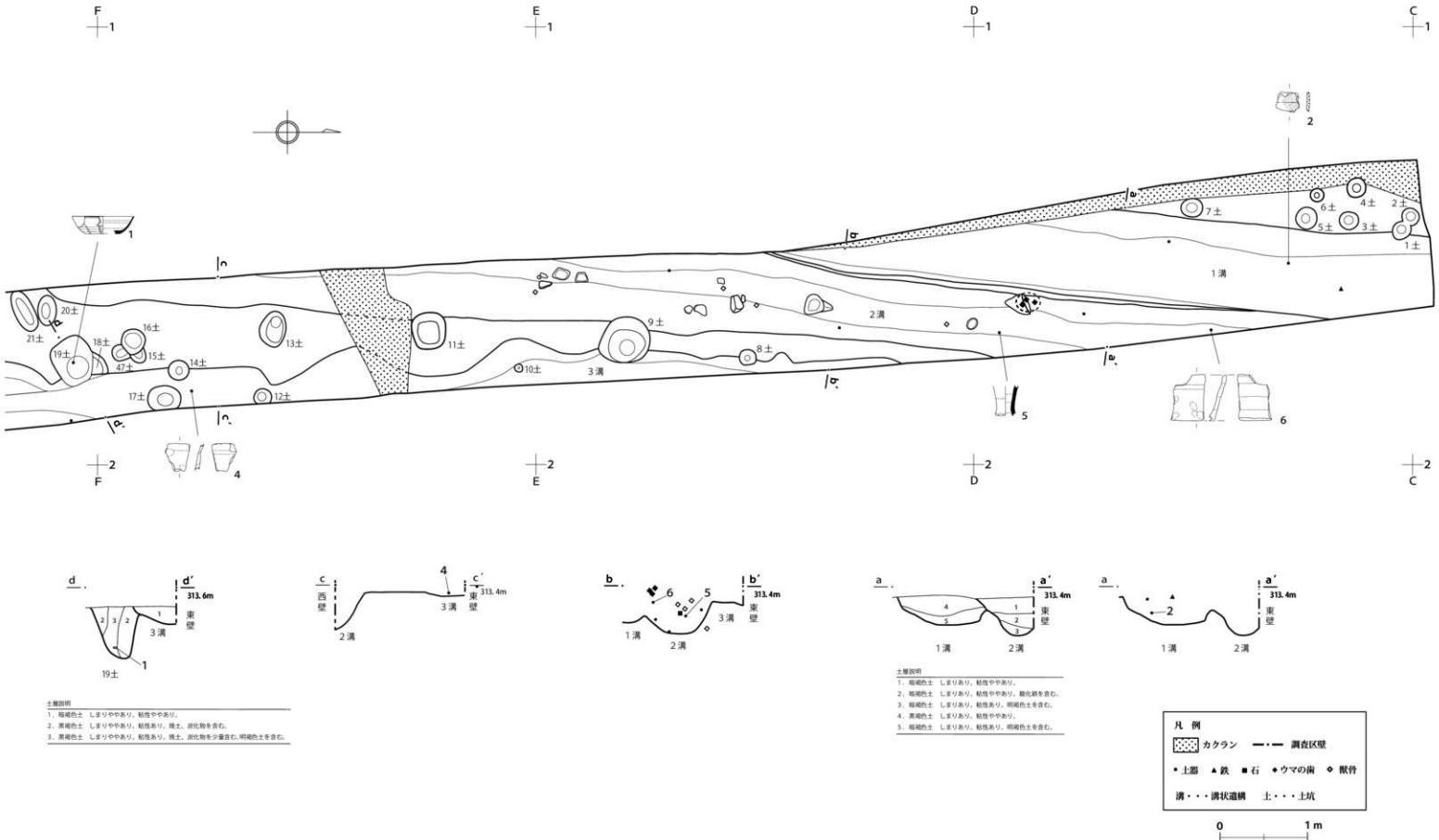
土坑番号	位置	形	径(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
1	D 2	円形	20			6	土師器小片出土
2	C 2、D 2	円形	20			6.6	土師器小片出土
3	D 2	円形	22			12	
4	D 2	円形	23			7	土師器小片出土
5	D 2	楕円形		25	20	7	
6	D 2	円形	17			10.6	
7	D 2	円形	24			18	
8	E 2	円形	18				
9	E 2	扁丸方形		54	53	40	土師器小片出土
10	F 2	—	—	—	—	—	
11	F 2	扁丸方形		40	40	19	土師器・須恵器小片出土
12	F 2	円形		20		23	
13	F 2	楕円形		39	29	19.2	土師器・須恵器小片出土
14	F 2	円形	24			13	
15	F 2	—				8.6	焼塙土器小片 1点出土
16	F 2	—				11.7	
17	F 2	—				27.1	
18	F 2、G 2	—				61.6	
19	G 2	不整形		53	45	57.9	土師器小片・須恵器坏出土 多量の炭化物検出
20	G 2	楕円形		33	21	9.1	土師器・須恵器小片出土
21	G 2	楕円形		48	23	11.6	
22	G 2	不整形		23	16	12.8	
23	G 2	楕円形		36	32	19	土師器小片出土
24	G 2	円形	17			7	鍋片出土
25	G 2	円形	21			11.7	
26	G 2	楕円形		20	24	11.2	
27	G 2	円形	20			10.1	
28	G 2	—				29.5	土師器小片出土
29	G 2	—				22	
30	H 2	円形	22			14.7	
31	H 2	楕円形		58	26	10.5	土師器小片出土
32	H 2	円形	26			12	
33	I 2	楕円形		36	30	12.6	
34	J 3	—				32	内耳鍋片出土
35	I 2	楕円形		24	18	8.3	
36	I 2	楕円形		48	30	17	
37	J 2	楕円形		24	20	13	
38	J 2	楕円形		32	26	6.8	
39	J 2	円形	18			6.3	
40	K 3	楕円形		28	24	20.8	
41	K 3	不整形		42	38	24.4	土師器・鍋小片出土
42	L 2、L 3	円形	18			9.7	
43	K 3	楕円形		26	22	15.5	
44	L 3	不整形		52	40	16.8	かわらけ・土師器片出土
45	L 3	—				5	
46	I 2	円形	14			8.1	
47	F 2	—	—	—	—	16	



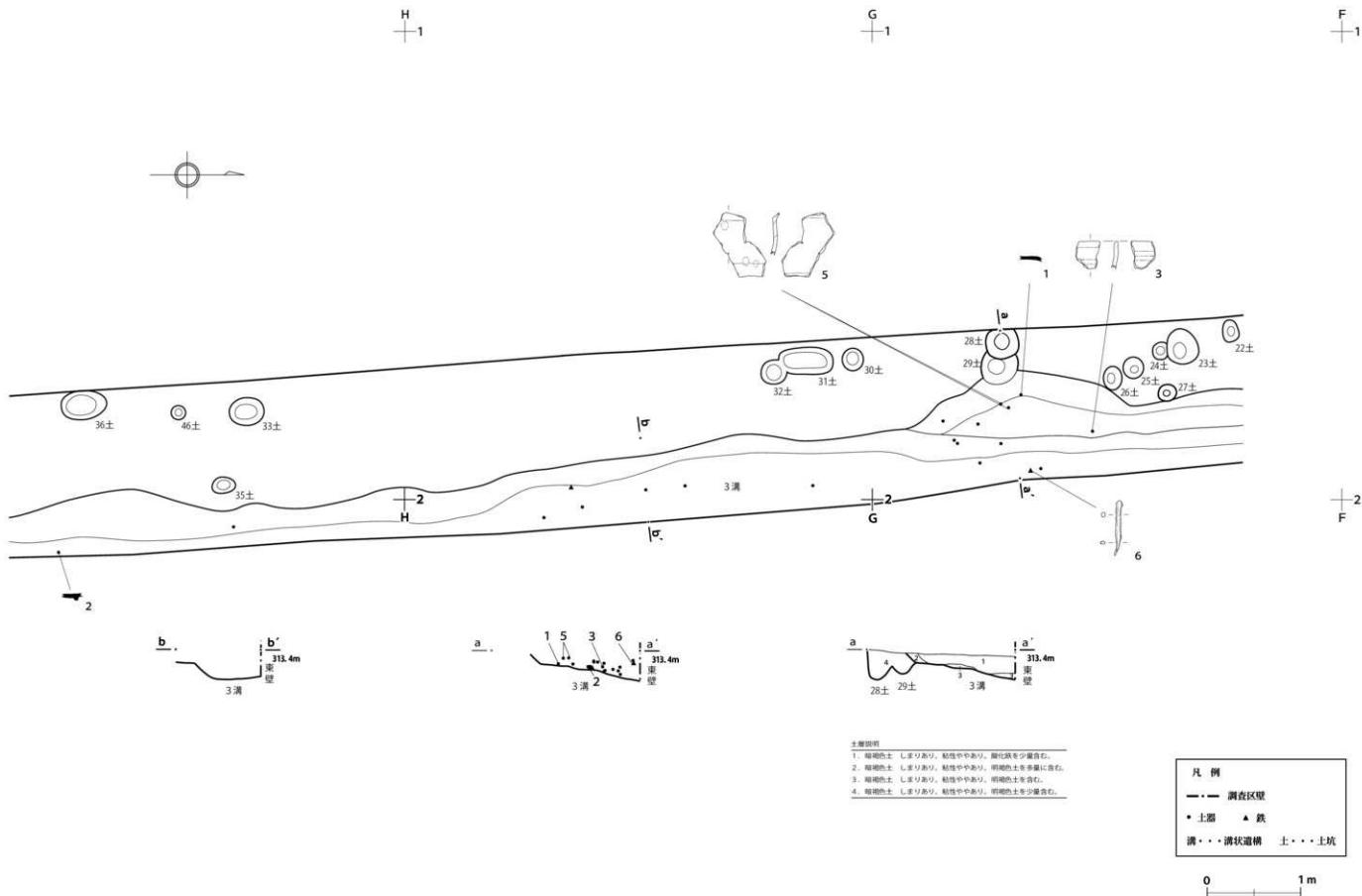
第6図 1号住居址平・断面図 (1/40)



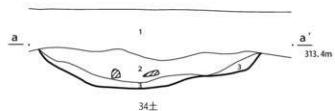
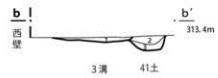
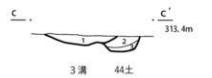
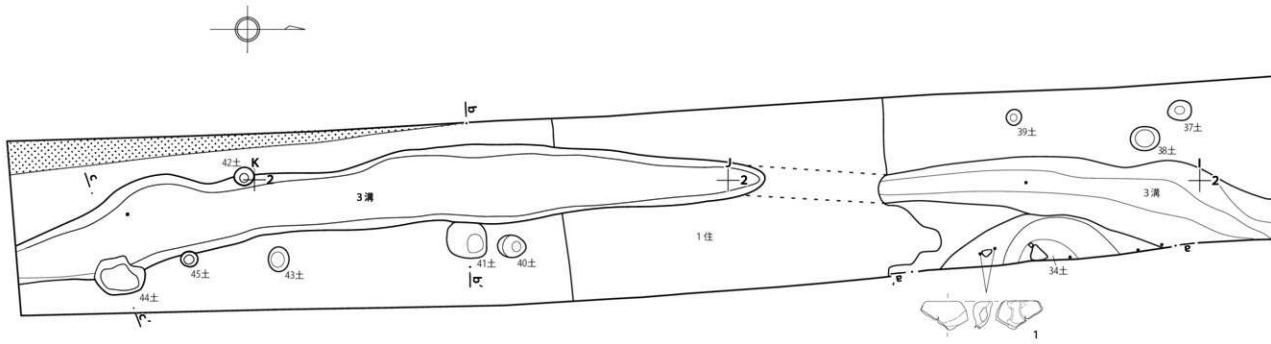
第7図 1号住居址竪平・断面図およびエレベーション図 (1/20)



第8図 C2～G2平面図、1～3号溝・19号土坑断面図およびエレベーション図 (1/40)



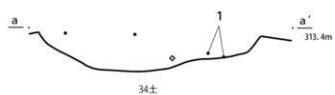
第9図 G2～I2・H3～I3平面図、3号溝・28・29号土坑断面図およびエレベーション図 (1/40)



土壤剖面
1. 黒褐色土 しりあり、粘性ややあり。
2. 黒褐色土 しりあり、粘性あり。
3. 明褐色土 しりあり、粘性あり。黒褐色土を含む。

土壤剖面
1. 黒褐色土 しりあり、粘性ややあり。
2. 黒褐色土 しりあり、粘性あり。
3. 明褐色土 しりあり、粘性あり。黒褐色土を含む。

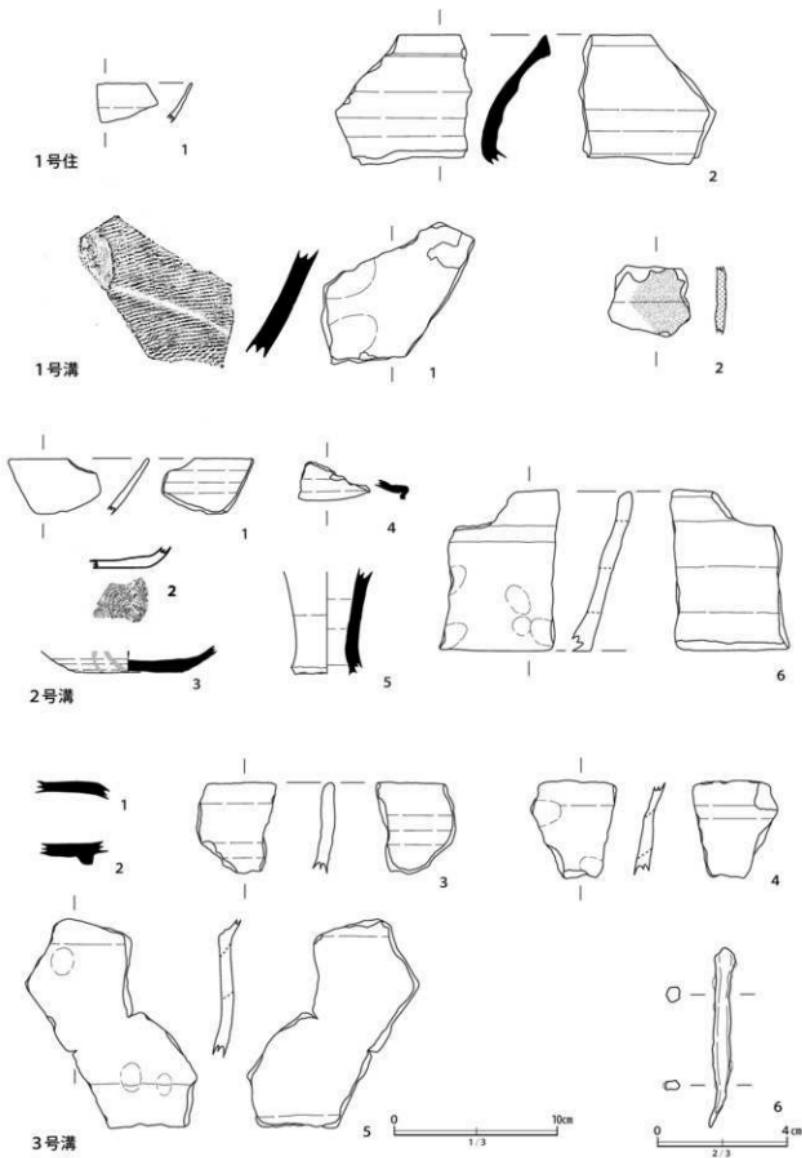
土壤剖面
1. 黒褐色土 しりあり、粘性ややあり。
2. 黒褐色土 しりあり、粘性あり。
3. 明褐色土 しりあり、粘性あり。黒褐色土を含む。



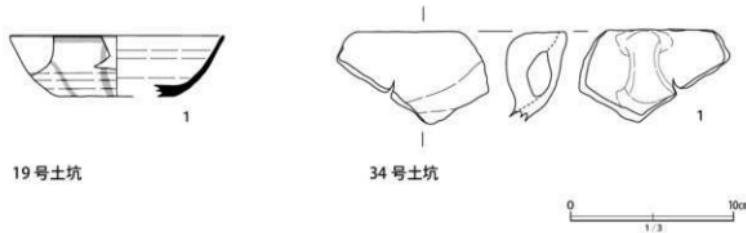
凡例	
■ 石断面	— 調査区界
● 上器	◆ 骨格
住	溝
・	・ 溝状遺構
・	土坑

0 1m

第10図 | 2～L 2 + | 3～L 3 平面図、3号溝・34・41・44号土坑断面図およびエレベーション図 (1/40)



第11図 1号住居址、1～3号溝出土遺物 (1/2・2/3)



第12図 19・34号土坑出土遺物 (1/3)

第2表 土器観察表 (第11・12図)

回数	遺物名	番号	種別	器種	宮ノ前	法量 (cm)		堆存率 (%)	製作技法	胎土	含蓄物	色調 外/内	焼成	注記番号	備考
						口径	底径								
11回	1号住	1	土器鉢	坪	N~V	—	—	—	□縁破片	胎	白色粒子	黄褐色/黒褐色	中や良	SU2-2-1住	内面裏側
11回	1号住	2	泥質器	盤	N~V	—	—	—	□縁破片	胎	白色粒子	灰褐色/灰褐色	良	SU2-2-1住-34+	
11回	1号溝	1	泥質器	盤	平型	—	—	—	側面部破片 当底直	タクチ	胎	白色/灰色	中や良	SU2-2-17-17	
11回	1号溝	2	泥質陶器	長脚盤?	平型	—	—	—	破片	胎	黑色粒子	深オフワード灰	良	SU2-2-17-2	
同前	1号溝	3	土器鉢	底付	中型	—	—	—	破片	胎	中や細、白色、淡色粒子	淡褐色/明褐色	中や良	SU2-2-17-	軽質
同前	1号溝	4	土器鉢	底付	中型	—	—	—	破片	胎	中や細、白色、淡色粒子	淡褐色/明褐色	良	SU2-2-17-	軽質
同前	1号溝	5	土器鉢	底付	中型	—	—	—	破片	胎	白色粒子	明褐色	良	SU2-2-17-	軽質
11回	2号溝	1	土器鉢	坪	N~V	—	—	—	□縁破片	胎部凹出部 切	白色粒子	淡褐色/浅褐色	中や良	SU2-2-217	内面裏側
11回	2号溝	2	土器鉢	坪	N~VI	—	—	—	底部破片	胎	白色粒子	灰褐色/灰褐色	不良	SU2-2-217	軽質
11回	2号溝	3	泥質器	坪	B~VI	—	7.5	—	底部破片	胎	底部へ少しきず	灰褐色/灰褐色	良	SU2-2-217	大厚底、反転実
11回	2号溝	4	泥質器	底盤	V	—	—	—	破片	胎	白色粒子	灰褐色/赤灰褐色	良	SU2-2-217	薄
11回	2号溝	5	泥質器	長脚盤?	中型	—	—	—	側面部破片	胎	白色粒子	灰褐色/灰褐色	良	SU2-2-217-2	
11回	2号溝	6	土器	ほうく	中型	—	—	—	破片	指輪痕	白色粒子	白	中や良	SU2-2-217-3	
11回	3号溝	1	泥質器	蓋	V	—	—	—	破片	胎	白色粒子	灰褐色/灰褐色	良	SU2-2-217-5	
11回	3号溝	2	泥質器	高脚杯	V	—	—	—	底部破片	胎	白色粒子	灰褐色/灰褐色	中や良	SU2-2-317-22	
11回	3号溝	3	土器	鍋	中型	—	—	—	□縁破片	胎	白色粒子	灰褐色/灰褐色	中や良	SU2-2-317-3	
11回	3号溝	4	土器	(内算?)	中型	—	—	—	□縁破片	指輪痕	白色粒子	灰褐色/灰褐色	中や良	SU2-2-317-4	
11回	3号溝	5	土器	鍋	中型	—	—	—	底部破片	指輪痕 切	白色粒子	淡褐色/褐褐色	中や良	SU2-2-317-6-7	
12回	19号土坑	1	泥質器	坪	B~IV	13	7	3.7	20	胎部凹出部 切	白色粒子	青褐色/黄褐色	良	SU2-2-19土	大厚底、反転実
12回	34号土坑	1	土器	内耳鍋	中型	—	—	—	□縁破片	胎	中や細 粒子	褐色/褐色	中や良	SU2-2-34-1+2	

第3表 鉄製品観察表 (第11図)

回数	出土地点	番号	種類	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
11回	3号溝	6	錫状鉄製品	5.6	0.5	0.4	3	

第IV章 理科学的分析

第1節 坂ノ上姥神遺跡第2地点および第3地点の炭化種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

御勅使川扇状地扇端付近に立地する坂ノ上姥神遺跡（山梨県南アルプス市徳永）は、これまで発掘調査の結果、古代および中世の集落跡であることが確認されている。本報告では、坂ノ上姥神遺跡第2地点および第3地点（第V章参照）の平安時代の竪穴住居址カマドの埋植物等より得られた炭化物を対象に種実遺体分析を実施し、栽培植物を含む植物利用状況について検討した。

1. 試料

試料は、試掘調査の第2地点 7T より検出された竪穴住居址（1号住、2号住）のカマド、第3地点 1T より検出された竪穴住居址（1号住）のカマド、さらに本調査で検出された竪穴住居址（1号住）のカマドおよび土坑（19号土坑）覆土より回収された炭化物である（第3図、表1）。炭化物試料は、住居址がカマドの覆土および焼土、土坑が覆土より採取された土壤の水洗選別によって回収されており、それぞれフィルムケースで保管された状態にあった。

各試料の観察では、炭化種実のほか、炭化材や炭化していない種実が確認された。本分析では、上記した目的を踏まえ、炭化物試料中の炭化種実の抽出と同定を中心に行った。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて炭化種実を拾い出す。炭化種実の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、結果を一覧表に示す。分析後は、検出された分類群を容器に入れて保管する。

3. 結果

（1）種実の検出状況

結果を表1に示す。全試料を通じて、木本3分類群（落葉広葉樹のオニグルミ、マタタビ、スモモ）7個と、草本6分類群（イネ、コムギ、アワ近似種、ヒエ近似種、イネ科、マメ科）133個、計140個の炭化種実が検出された。検出された炭化種実のうち、栽培種は、スモモの破片4個、イネ99個、コムギ4個、アワ近似種7個、ヒエ近似種17個と、栽培種の可能性があるマメ科2個の計133個が確認された。

一方、炭化していない分類群は、オモダカ科、イボクサ、イネ、イヌヒエ近似種、オヒシバ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ属、イヌタデ近似種、タデ属、スペリヒユ、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、エノキグサ、オドリコソウ属の種実105個と、栽培種のイネの穎の破片29個が確認された。全て草本で、水生植物のオモダカ科、イボクサ、ホタルイ属を含むことから、調査地周辺の開けた場所や水湿地等の草地環境に由来すると考えられる。なお、これらの分類群は、保存状態から後代の混入の可能性が高く、炭化種実と履歴が異なると想定される。そのため、本報告では考察からは除外し、検出状況の表示に留めた。

以下に、各地点の炭化種実の検出状況を記す。

1) 第2地点 本調査

1号住カマドフク土からは、落葉高木のオニグルミの核（破片2個）と、栽培種のヒエ近似種の胚乳（1個）が確認された。19号土坑からは、落葉灌木のマタタビの種子（1個）、栽培種のスモモの核（破片4個）、イネの胚乳（76個、うち1個が穎付着）、アワ近似種の胚乳（6個、うち2個が穎付着）、ヒエ近似種の穎付着胚乳（2個）、計92個の炭化種実が確認された。

2) 第2地点 試掘調査

7T 1号住カマドフク土からは、栽培種のイネの胚乳（1個）、栽培種の可能性があるマメ科の種子（2個）が確認された。2号住カマドフク土からは、栽培種のイネの胚乳（18個）、アワ近似種の胚乳（1個）、ヒエ近似種の胚乳（13個、うち1個が穎付着）、草本のイネ科の果実（1個）と胚乳（3個）、計36個の炭化種実が確認された。

3) 第3地点 試掘調査

1T 1号住カマドフク土からは、栽培種のイネの胚乳（2個）、ヒエ近似種の胚乳（1個）、同カマド焼土からはイネの胚乳（2個）が確認された。また、1号住の土坑1フク土からは、栽培種のコムギの胚乳（1個）が確認された。

(2) 炭化種実の記載

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属

核は炭化しており黒色。完形ならば、長さ3-4cm、径2.5-3cm程度の広卵体。頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。破片の大きさは、最大3.8mm程度。

・マタタビ (*Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Maxim.) マタタビ科マタタビ属

種子は炭化しており黒色。長さ1.5mm、径0.8mm程度の両凸レンズ状楕円体。基部は斜切形でやや突出する。種皮は硬く、表面には円-楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

・スモモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核（内果皮）は炭化しており黒色。完形ならば、長さ1-2cm、幅0.9-1.5cm、厚さ0.8cm程度のレンズ状広楕円体。頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。内側表面は平滑で、種子1個が入る楕円状の窪みがみられる。破片の大きさは、最大5.5mm程度。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ4-5mm、幅2.5-3.5mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。胚乳表面に穎の破片が付着する個体がみられる。胚乳を包む穎（果）は、淡灰褐色、炭化個体は黒色。完形ならば、長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲粒を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。穎の破片の大きさは、最大1.7mm程度。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ3mm、径2.2mmと長さ2.2mm、径1.9mm程度の楕円体。腹面は

表1 種実同定結果

分類群	部位	状態	未調査		試験調査					
			1月往		2月往		第1地点 月		第2地点 月	
			カマド フクシ							
		炭化物	炭化物	炭化物	炭化物	種	炭化物	炭化物	炭化物	炭化物
に伝播種										
オニグルミ	核	破片	-	2	-	-	-	-	-	-
マタタビ	種子	完形	-	-	1	-	-	-	-	-
スモモ	核	破片	-	-	1	2	1	-	-	-
イネ	胚-胚乳	破片	-	-	1	-	-	-	-	-
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-
コムギ	胚乳	破片	-	-	26	33	5	15	3	1
		完形	-	-	1	-	-	-	-	-
アワ近似種	胚-胚乳	破片	-	-	2	-	-	-	-	-
	胚乳	完形	-	-	4	-	-	-	-	-
ヒエ近似種	胚-胚乳	破片	-	-	2	-	-	-	-	-
	胚乳	完形	-	-	1	-	-	-	-	-
イネ科	果実	破片	-	-	-	-	-	11	-	1
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	種子	完形	-	-	-	-	-	3	-	-
	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-
<炭化していない分類群>										
オボシカズラ	種子	完形	-	-	-	-	-	2	-	-
イボクサ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-
イネ	胚-基部	破片	-	8	-	-	-	-	-	-
	胚	破片	-	20	-	-	-	-	-	-
イヌヒエ近似種	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	1
オビシバ	種子	完形	-	2	-	-	-	-	-	-
イネ科	果実	破片	-	1	-	-	-	-	-	-
ホタキイ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	1
カヤツリグサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	2	5	-
		破片	-	-	-	-	-	1	-	-
イヌヒエ近似種	果実	完形	-	3	-	-	-	-	-	-
タデ属	果実	完形	-	1	-	-	-	-	-	-
スペリヒエ	種子	完形	-	-	1	-	-	-	-	-
ナデコ科	種子	破片	-	-	2	-	-	30	12	-
アカバナ科	種子	完形	-	-	4	-	-	-	-	-
ヒユ科	種子	完形	-	-	1	-	-	1	-	-
エノキグサ	種子	完形	-	2	-	-	-	2	-	-
オドリコソウ属	果実	完形	-	2	-	-	-	-	-	-
<その他>										
穀粒			1	*	*	*	*	1	*	4
穀壳			1	*	*	*	*	1	*	4
谷片			-	11	-	-	-	9	2	-
不明			-	-	2	2	-	1	5	9

正中線上にやや太く深い縱溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面には微細な粒状模様があるが、発泡しており状態が悪く不明瞭。

・アワ近似種 (*Setaria cf. italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

穎-胚乳は炭化しており黒色。胚乳は長さ 1.0-1.5mm、幅 1.2-1.53mm、厚さ 0.8-1.0mm 程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中線上に径 0.5-0.7mm 程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面はやや平滑。表面に穎(果)が付着している個体がみられ、果皮表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa cf. utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科ヒエ属

穎-胚乳は炭化しており黒色。長さ 1.4 (頸付着は 1.9) mm、幅 1.2mm、厚さ 0.8mm 程度の狭卵-半偏球体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、長さ 1.2mm、最大幅 0.7mm 程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、表面に穎(果)が付着している個体がみられる。果皮表面には微細な縱長の網目模様が縱列し、平滑で光沢がある。なお、アワやヒエよりも小型の果実と胚乳をイネ科としている。

・マメ科 (Leguminosae)

種子は炭化しており黒色、2個の出土のうち、1個は長さ 3.89mm、幅 2.60mm、厚さ 2.11mm のやや偏平な楕円体。腹面の子葉合わせ目上の臍を欠損し、窪んでいる。1個は破片で、長さ 2.86mm(+)、幅 2.69mm、厚さ 1.77mm である。種皮表面はやや平滑で、表面が割れている。

4. 考察

坂ノ上姥神遺跡第2地点および第3地点の平安時代の堅穴住居址カマドや土坑覆土試料より検出された炭化種実には、栽培種のスモモ、イネ、コムギ、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）と、栽培種の可能性があるマメ科等が確認された。これらの栽培種および栽培種の可能性がある分類群の検出状況についてみると、栽培種が最も多く確認された本調査地点の19号土坑では、イネを主体として、コムギ、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）、スモモ等が確認された。一方、住居址カマド試料では、第2地点試掘調査TTの2号住居カマドにおいて32個検出された他は各住居址は1～6個と少なく、土坑と住居址カマド試料における炭化種実の検出状況が異なる。また、検出された炭化種実のうち、イネ、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）には穎が付着した個体が確認されており、穎が付着した状態で火を受けた状況が推定される。

本遺跡に隣接する古代の集落では、今回の分析調査と同様に住居址に伴うカマドや土坑、ピットから検出された炭化物等の分析調査が実施されている。本遺跡の北に位置する野牛島・西ノ久保遺跡では、平安時代の住居址よりイネやムギ類とともにアワ、ヒエ、マメ類等の穀類が確認されている（柳原, 2009・パリノ・サーヴェイ株式会社, 2009）。また、野牛島・大塚遺跡の平安時代の住居址カマドや土器内よりイネやマメ類（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2000）が、百々遺跡3の平安時代の舟形土坑から多量のオオムギをはじめとして、コムギ、アワヒエ（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004）等が確認されている。

本遺跡の平安時代の住居址カマド試料のうち、栽培種の炭化種実が比較的多く検出された第2地点試掘調査TTの2号住居カマドからは、イネおよびヒエ（近似種）が多く検出された。一方、上記した野牛島・西ノ久保遺跡の平安時代の住居址では、オオムギやコムギを含むムギ類やイネが多く、これにアワやヒエ、マメ類等の雑穀類が伴うという傾向が確認されている。本遺跡では、ムギ類の検出が少なく、野牛島・西ノ久保遺跡とやや組成が異なる状況が窺える。

栽培種以外の分類群では、オニグルミ、マタタビ、イネ科が確認された。オニグルミは、川沿いなどの温潤な肥沃地に生育する落葉高木であり、核内部の種子が食用可能である。カマド内より検出されたことを考慮すると、可食部を取り出した後の残渣の処理、あるいは利用後の痕跡と考えられる。マタタビは、森林の林縁部等の明るく開けた場所に先駆的に侵入する落葉藤本であり、イネ科は、明るく開けた草地環境に生育する草本である。これらは、遺跡周辺の森林の林縁部や草地に生育していた分類群に由来すると考えられる。

引用文献

- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 柳原功一 2009 『第11節 種実分析』『野牛島・西ノ久保遺跡 III・V・VI区』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第20集 南アルプス市教育委員会・財團法人山梨文化財研究所, 101-103.
- 中山至大・井口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大出版会, 642p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2000 『野牛島・大塚遺跡発掘調査に伴う自然科学分析報告書』『野牛島・大塚遺跡』 八田村文化財調

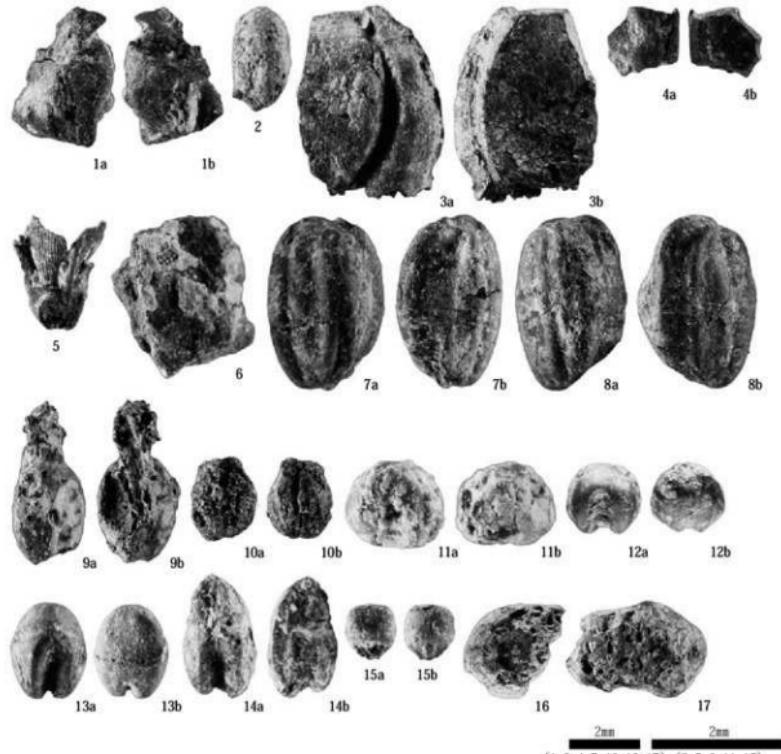
査報告書第2集 八田村教育委員会・山梨県甲府土木事務所,81-86.

パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「百々遺跡3・5における自然科學分析」『百々遺跡3・5』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第213集 山梨県埋蔵文化財センター編・山梨県教育委員会・国土交通省甲府河川国道事務所・日本道路公団東京建設課,368-376.

パリノ・サーヴェイ株式会社 2009 「野牛島・西ノ久保遺跡の種実同定と花粉分析」『野牛島・西ノ久保遺跡 III・V・VI区』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第20集 南アルプス市教育委員会・財团法人山梨文化財研究所,72-79.

南アルプス市教育委員会 2010 「坂上姫神遺跡(第2地点)」『平成20年度埋蔵文化財試掘調査報告書』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第24集 南アルプス市教育委員会,15-39.

図版1 種実遺体



1. オニグルミ 核(1号住 カマドフク土)

3. スモモ 核(19号土坑)

5. イネ 頸(19号土坑)

7. イネ 胚乳(19号土坑)

9. コムギ 胚乳(19号土坑)

11. アワ近似種 頸・胚乳(19号土坑)

13. ヒエ近似種 頸・胚乳(第2地点 TT;2号住 カマドフク土)

15. イネ科 胚乳(第2地点 TT;2号住 カマドフク土)

17. マメ科 種子(第2地点 TT;1号住 カマドフク土)

2. マタタビ 種子(19号土坑)

4. スモモ 核(19号土坑)

6. イネ 頸(19号土坑)

8. イネ 胚乳(19号土坑)

10. コムギ 胚乳(第3地点 TT;1号住 土坑1フク土)

12. アワ近似種 胚乳(第2地点 TT;2号住 カマドフク土)

14. ヒエ近似種 頸・胚乳(第2地点 TT;2号住 カマドフク土)

16. マメ科 種子(第2地点 TT;1号住 カマドフク土)

(1, 3, 4, 7-10, 16, 17) (2, 5, 6, 11-15)

第2節 坂ノ上姥神遺跡第2地点から出土した動物遺体

植月 学（山梨県立博物館）

本遺跡の2次試掘調査第7トレンチ、および本調査において若干の動物遺体が出土した。すべて調査時に目視により採集されたものである。14点の標本が同定されたが、種まで同定できたのはウマのみであった。その他はいずれも哺乳類の骨片と判断されたが、遺存状態が非常に悪く、部位を同定するまでは至らなかった。

ウマも同定できたのは歯のみであり、やはり遺存状態は不良である。外部のセメント質はほぼ消失し、エナメル質のみをとどめる。すべて溝から出土した。溝の時期は奈良・平安時代を中心とするが、一部中世まで機能していた可能性がある（詳細は第V章第2節参照）。2次試掘調査第7トレンチの1号溝（本調査1号溝もしくは2号溝に相当）からは切歯破片、および下顎後臼歯（M1/M2）が各1点出土した。歯冠高による推定年齢は7～8歳である。3号溝からは上顎の右側後臼歯（M1-M3）が出土した。M1とM2の区別は困難だが、同一個体との前提で同定した。それぞれ年齢は7～8歳前後と推定され、同一個体とみなして矛盾はない。他に下顎前臼歯（P3/P4）の破片も出土した。1号溝の下顎と3号溝の上顎は年齢的にも重なり、別個体とは断定できない。

本調査の2号溝からも馬歯が出土した。破片が多いため、判然としないが、下顎前臼歯（P3/P4）や下顎歯の破片が含まれる。下顎P3/P4の推定年齢は大きく見積もっても4～5歳であり（歯根部が破損しているため）、上記試掘調査出土の個体とは別個体と推定される。

馬歯のサイズはかなり小形である。図は山梨および近県の遺跡から出土した古墳時代から中世の馬歯のサイズをプロットしたものである。馬歯は加齢とともに磨耗し、その際に歯冠長も変化するので、歯冠長を比較する際は歯冠高も考慮する必要がある。M2では図に見られるように加齢とともに歯冠長を減じる。

図には歯冠長と歯冠高が計測できた本遺跡3号溝出土の上顎M2の計測値も示した。本遺跡の個体は高さを加味してもっとも小形の一群に属することが明らかである。加齢による変動曲線を示した山梨市三ヶ所遺跡（中世）、甲府市塙部遺跡（古墳）よりも小形であり、茨城県村松白根遺跡（中世後半～近世初頭）とほぼ同程度である。村松白根遺跡の個体Aは四肢骨の計測値から体高112cmと推定されており（西本・浪形2007）、本遺跡の個体も同程度に小さかった可能性が高い。

表 同定結果

	地区	遺構	注記	No.	日付	分類群	部位	左右	備考	計測値	推定年齢
2次 試掘 調査	第7 トレンチ	1号溝	骨・角	No.1	08/11/28	ウマ	下顎 M1/2	右	完存	H<50	7.2/8.0
			骨・角	No.2	08/11/28		上／下顎切歯	?	破片		
			歯（馬）	No.1	08/11/28		上顎 M1	右		H:41+	~8.3
			歯（馬）	No.2	08/11/28		上顎 M	右	類側破片		
			歯（馬）	No.3	08/11/28		上顎 M2	右		L:22.89, HC:51+	7.2
			歯（馬）	No.4	08/11/28		上顎 M3	右		L:23.67, B:18.81,	6.9
			歯一括		08/11/28		下顎 P3/4	右	下内歯		
		3号溝	骨片		09/06/18		四肢骨？	?	破片		
			骨	4	09/07/01		下顎 P/M	左	下後附錐、下内錐	H:60+（歯根実現存）	
			歯	5	09/07/01		下顎 P/M	左	下後錐		
					09/07/01		下顎 P3/4	左	HB:59+		4.7/5.4
本調査		2号溝	一括		09/06/30	ウマ	上・下顎 P/M	?	破片		
			34号土坑		09/07/14		哺乳類	?	?	シカ／イノシシ 以上	
					09/07/10			?	破片		

年齢推定は西中川・松元（1991）による。

B：歯冠幅、H：現存高、HB：類側歯冠高、HC：中心部歯冠高、L：歯冠長、M：後臼歯、P：前臼歯

ただ、本地域の平安期の馬が常に同様に小形であった訳ではなく、近隣の百々遺跡の2点の値は図に示したように、比較的大形と推定されるものであった。今後、少量の資料であっても同様のデータを蓄積していく事によって、本地域で生産された馬の体格とその構成、あるいは時期的変化を明らかにできると期待される。

引用文献

- 西中川 駿・松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(平成2年度文部科学省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書) 164-188
 西本豊弘・浪形早季子 2007 「村松白根遺跡の動物遺体(2004年度)」『村松白根遺跡2』茨城県教育財團文化財調査報告第284集 607-617

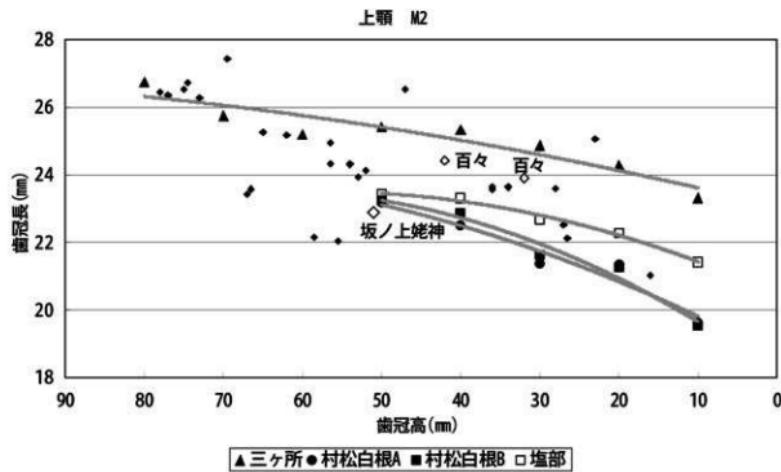


図 馬歯冠長・歯冠高の比較



図版 ウマ歯

1. 下顎M1/M2右 (3号溝No.1) 2. 上顎M1右 (3号溝No.1) 3. 上顎M2右 (3号溝No.3)
 4. 上顎M3右 (3号溝No.4) 5. 下顎P3/P4左 (2号溝) (縮尺: 約2/3)

第V章 総 括

本調査の結果、豎穴住居址（以下住居址）1軒、溝状遺構3条、土坑47基を検出した。本章では、平成20年度に実施した第2地点の試掘調査およびこれまで実施した近接地の試掘調査結果も合わせて総括したい。なお、以下平成15年に実施した坂ノ上姥神遺跡の試掘調査および本調査地点を第1地点、平成20～21年に南アルプス子どもの村小学校建設に伴い実施した試掘および本調査地点を第2地点、平成21年に実施した個人住宅（徳永1729-3）に伴う試掘調査を第3地点と呼称する（第13図）。

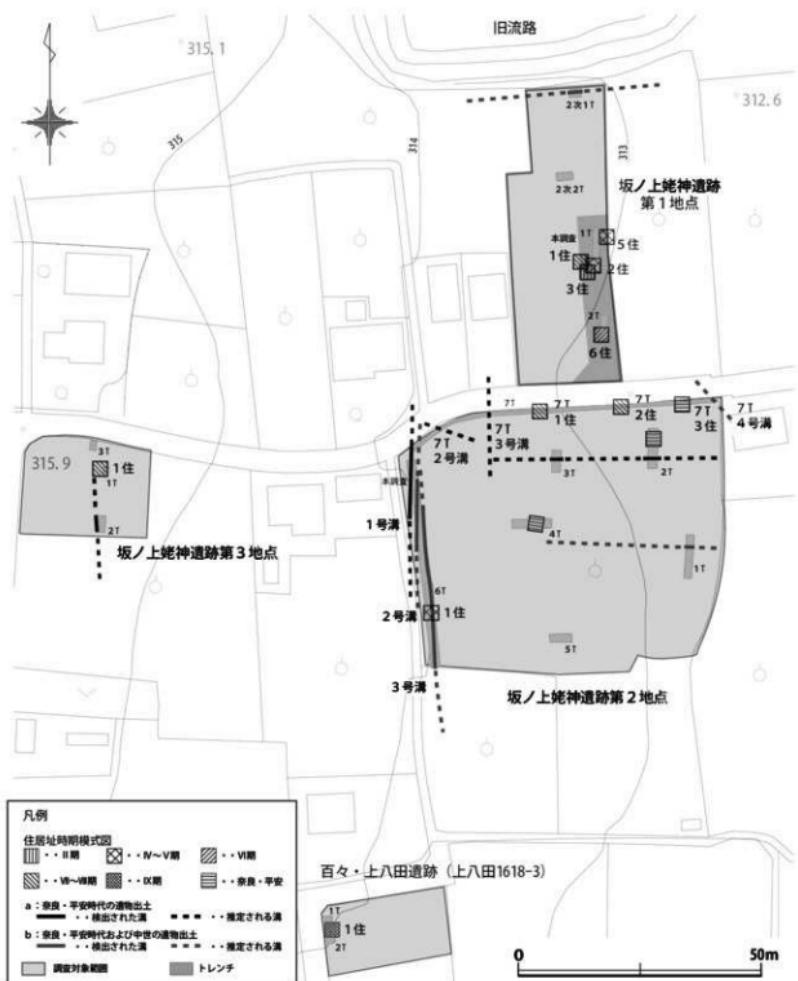
第1節 豊穴住居址

第2地点本調査および試掘調査で検出された住居址の総数は6軒で、その内発掘調査が行われたのは4軒である（第13図、第4表）。第1地点の本調査で5軒、第3地点試掘調査で1軒、平成16年徳永・御崎遺跡試掘調査で1軒、平成18年百々・上八田遺跡（上八田1618-3地点）試掘調査で1軒を含めると発掘された住居址の合計は12軒、未発掘の2軒を含めると合計14軒の住居址が検出されている（第4表）。時期別にみてみると、宮ノ前Ⅱ期（8C中）（以下宮ノ前省略）が1軒、IV～V期（8C末～9C初）が3軒、VI期（9C前）が1軒、VII～VIII期（9C後～10C初）が4軒、IX期（10C前～中）が1軒、奈良・平安時代が4軒であり、8世紀中頃から少なくとも10世紀前半まで継続的に集落が営まれたことが明らかとなった。

一方本遺跡から西に1.2kmの地点の扇状地扇央部に位置し、中部横断自動車道路の建設に伴って発掘調査された百々遺跡1～5では、251軒の住居址が検出されている。百々遺跡南部は甲斐型編年（以下甲斐型）のVII期（9C初）から甲斐型XII期（10C前）まで集落が継続されるが、甲斐型XII期頃の洪水によって放棄されたと想定されている。北部は甲斐型VII期から中世の15世紀頃まで継続して集落が形成されていたことが明らかとなっている。

ここで両遺跡の集落の形成時期を比較すれば、百々遺跡では251軒もの住居址が検出されているにもかかわらず、坂ノ上姥神遺跡で発見されている8世紀代の住居址の検出例はない。これは坂ノ上姥神第4表 坂ノ上姥神遺跡および周辺の遺跡検出豎穴住居址一覧

遺跡名	調査区分	遺構	年代	宮ノ前	甲斐型	山梨県史	備考
坂ノ上姥神遺跡第1地点	本調査	1号住居	9C終～10C初	VII	X I	VI	
		2号住居	8C末	IV	VI	III	
		3号住居	8C中	II	V	III	
		4号住居	—	—	—	—	欠番
		5号住居	8C後	IV	VI	III	
		6号住居	9C前	VI	VII	IV	
坂ノ上姥神遺跡第2地点	試掘調査2T	住居	奈良・平安	—	—	—	未発掘
	試掘調査4T	住居	奈良・平安	—	—	—	未発掘
	試掘調査7T	1号住居	9C終～10C初	VII	X I	VI	
	試掘調査7T	2号住居	9C終～10C初	VII	X I	VI	
	試掘調査7T	3号住居	平安	—	—	—	
坂ノ上姥神遺跡第3地点	本調査	1号住居	8C末～9C初	IV～V	VI～VII	III～IV	
	試掘調査	1号住居	9C後～10C初	VII～VIII	X～XI	V～VI	
徳永・御崎遺跡第3地点	試掘調査	1号住居	奈良・平安	—	—	—	
百々・上八田遺跡（上八田1618-3）	試掘調査	1号住居	10C前～10C中	IX	X II	VI	



第13図 坂ノ上姥神遺跡検出された竪穴住居址および溝状遺構 (1/1,000)

遺跡が立地する扇端部での集落形成が扇尖部より先行し、扇尖部の開発はやや遅れた平安時代以降から始まった状況を示唆している。今後の調査によって、百々遺跡周辺の扇尖部にも8世紀代の住居址が検出される可能性はあるが、集落形成において扇端部が扇尖部より先行する大局的な変遷は変わらないであろう。

市内の遺跡分布状況をみて、御動使川扇状地扇端部に遺跡が集中する傾向がある。これは釜無川の洪水の影響を受けにくく、また浸食崖下に広がる沖積低地を利用できる環境が、集落の立地として選択され続けた結果であると推測される。

第2節 溝状遺構

本遺跡で検出した溝状遺構（以下溝）は、試掘調査も含めると南北方向の溝6条、東西方向の溝3条、北西から南東へのびる溝2条が確認されている。以上の結果をまとめたものが第13図である。

南北方向に走る5条は、西から第3地点第2トレンチ（以下トレンチはTで表す）で1条、百々・上八田遺跡（上八田1615-1地点）で1条、第2地点本調査の1号溝（試掘調査第7T1号溝の西端と同一遺構）、2号溝（試掘調査第7T1号溝と同一遺構）、3号溝および第2地点試掘調査第7T3号溝である。東西方向に走る3条の溝は、北から第1地点2次試掘調査第1Tで1条、未発掘ながら第2地点第2・3Tで1条、第2地点第1Tで1条検出されている。北西から南東へのびる溝は第2地点試掘調査第7T2号溝と4号溝が検出されている。

溝の時期は、調査範囲が狭小であり出土遺物量も少なく時期の特定が困難であるが、出土遺物から分類すれば、奈良・平安時代の遺物が出土する溝（a）と奈良・平安時代の遺物および中世の遺物が含まれる溝（b）の2パターンに分けられる（第13図）。なお、百々・上八田遺跡（上八田1615-1地点）は遺物が出土していないため、時期は不明である。

a：10条の内、5条が該当する。ただし調査範囲が広がれば、中世の遺物が含まれる可能性もある。これに該当する5条は検出された住居址との切り合い関係がない。詳細な時期の特定はできないが、溝によってはいくつかの住居址と同時に存在した可能性が想定される。

b：出土遺物が15～16世紀の中世の遺物を主体とする溝と奈良・平安時代の遺物が主体で中世の遺物がわずかに含まれる溝がある。古代から中世までの継続性についての判断は難しいが、中世の遺物を主体とする溝については、中世には利用されていた可能性が高いと考えられる。

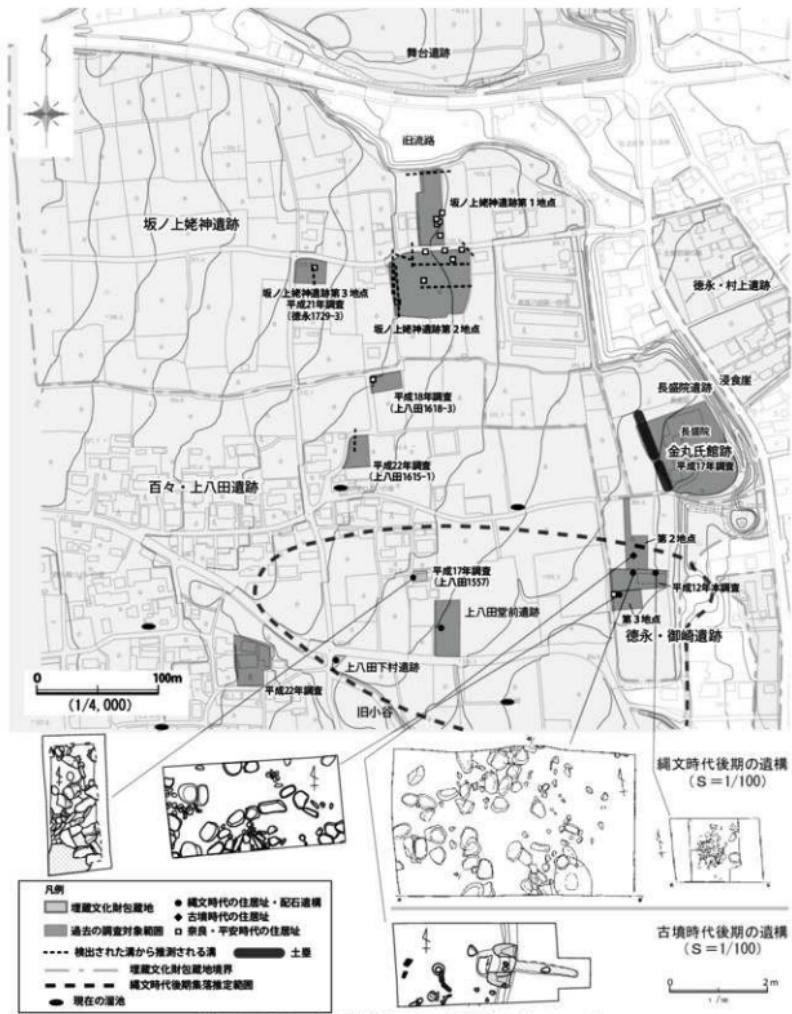
次に溝の役割について考えてみたい。注目されるのは、第2地点本調査2号溝（第7T1号溝は同一遺構）および第2地点試掘調査第7T3号溝の覆土中からウマの歯や獸骨が出土する点である。調査地点の地形を概観すると、東は釜無川の浸食により約10mの崖が形成され、北側は御勅使川の支流により浸食され、深い谷が形作られている。つまり北と東は天然の崖によって区画される地形となっている。御勅使川扇状地には高尾山穂見神社の御正脉（天福元年1233）に刻まれた「甲斐国八田御牧北鷹尾」の文字や大量のウマ・ウシの骨が検出された百々遺跡の事例から、扇状地上に私牧があったと想定されている。現段階では検出された溝と牧とを直接結びつけることはできないが、周辺の地形をも考えた場合、溝がウマを囲う施設の役割を果たしていた可能性も念頭に置き、今後の調査に臨むことが必要であろう。

一方で上八田地域は、第Ⅱ章第1節で述べたように、近世においては常磐早魃地域であり、生活用水は御勅使川あるいは徳島堰から水路を使って溜池へ通水させていたことが知られている。¹⁷ 水が不足していた状況は奈良・平安時代や中世でも同様と推測され、今回検出された溝が、水路として利用されていた可能性も考慮すべきであろう。

第3節 遺跡の広がりと時期変遷

ここで今回の調査成果およびこれまでの調査結果から、坂ノ上姥神遺跡周辺の遺跡の広がりと時期変遷をまとめてみたい（第14図、第4表）。

1期 繩文時代後期堀ノ内1～2式



第14図 坂ノ上姥神遺跡周辺の遺跡変遷 (1/4,000)

第14図に示した過去の調査地点の中で、上八田下村遺跡・上八田堂前遺跡・百々・上八田遺跡（上八田 1557 地点）、徳永・御崎遺跡・徳永・御崎遺跡第3地点で遺構が検出されている。以上の調査結果から、西は上八田下村遺跡付近から東は浸食崖まで、北は百々・上八田遺跡（上八田 1557 地点）付近、南は東西に走る深い谷までの範囲が繩文時代後期の集落範囲と推測できる。南側の深い谷は現在で

も崖下へ下りる道路となっており、この谷を利用した可能性も考えられる。

2期 古墳時代後期（県史編年X期） 6世紀第3～4四半期

徳永・御崎遺跡第2地点で竪穴住居址が1軒検出されている。長い煙道を持つカマドが住居東壁に造られている。これまで実施した試掘調査で1軒しか発見されていないことから、この周辺が集落の外縁か、居住密度が低かったと考えられる。

3期 宮ノ前II～V期（県史III期） 8世紀中～9世紀初頭

集落が形成され、竪穴住居址が増加する時期である。第1地点2号・3号・5号住居址および第2地点本調査1号住居址が該当する。

4期 宮ノ前VI～IX期（県史IV～VI期） 9世紀前半～10世紀前半

第1地点で2軒、第2地点試掘調査第7Tで2軒、第3地点で1軒、百々・上八田遺跡（上八田1618-3地点）で1軒、合計6軒検出されている。3期に比べ居住範囲が広がっている状況が把握できる。

5期 平安時代～中世 15～16世紀

溝から15～16世紀の土器が出土していることから、少なくとも第2地点の3号溝および試掘調査第1Tの溝や第7T4号溝は中世15～16世紀頃まで機能していたと考えられる。16世紀代には、坂ノ上姫神遺跡の南東に隣接して、武田家の重臣であった金丸氏館跡が、現在の曹洞宗長盛院の境内に立地していたとされている。甲斐国志に「開山慈照寺ノ二世謙翁宗益、天文中ノ草創、開基玉叟淨金庵主は長盛院ト称ス、金丸筑前守虎義ナリ、金丸土屋二氏ノ牌子ヲ列ス、境内モト虎義ノ宅地ニテ寺ハ他所ニアリ、延宝四年此ニ移スト云フ、今モ墜塲ノ形存セリ」とあり、延宝4年、長盛院が金丸虎義の宅地跡に他所から移されたと記されている。現在でも長盛院西側には幅約3mの虎口を伴う土塁が残されている。こうした点から、今回発見された溝の一部は、金丸氏館を中心とした戦国時代の土地利用に関係している可能性も推測される。

第4節 調査の成果と課題

小規模な発掘調査ではあったが、本遺跡によって御勅使川扇状地北部地域の古代における集落の展開および環境利用について、より詳細に検討するための調査成果が得られた。扇状地扇端部から扇央部への環境利用の一端が明らかとなった点は、地域の歴史を位置づける上で貴重な成果の一つと考えられる。これまで発掘された周辺の調査データを繋ぎ合わせることで、集落の立地と地形および環境利用についての知見が広がったと言える。今後も小規模な調査データを蓄積しながら、遺跡のひとつひとつを検証し、地域の歴史に光を当てていくことが必要であろう。

註

(註1) 南アルプス市教育委員会 2010 「平成20年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第24集

(註2) 南アルプス市教育委員会 2006 「平成17年度埋蔵文化財試掘調査報告書」 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第11集

(註3) 編年は柳原功一氏が宮ノ前遺跡で行ったものを利用した（柳原功一 1992 「第5章宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の土器・陶器」「宮ノ前遺跡」並木教育委員会他）。

(註4) 本調査地点から南東約270mの地点に位置する徳永・御崎遺跡第2地点では古墳時代後期（県史編年X期6世紀第3～4四半期）の住居址が1軒検出されている。

(註5) 今福利恵 2004 「第6章調査の成果」『百々遺跡3・5』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第213集 山梨県教育委員会他

(註6) 第2地点本調査2号溝はbで、奈良・平安時代が主体で少量の中世の副片等が出土している。また第2地点試掘調査第7T3号溝はaで、奈良・平安時代の遺物が少量出土している。出土遺物が少なく、確定された範囲での調査結果のためウマの歯の時期決定は今後の調査結果を得たなければならないが、現時点では溝のウマの歯は奈良・平安時代のものとしておきたい。

(註7) 白根町誌編纂委員会 1969 「白根町誌」 白根町

写 真 図 版

写真図版 1



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（南から）



3. 1号住居址（南から）



4. 1号住居址（西から）

写真図版2



1. 1号住居址竪（南から）



2. 1号住居址竪掘方（南から）



3. 1・2号溝（北から）

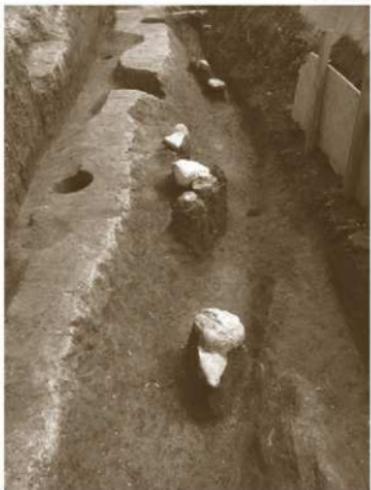


4. 1～3号溝（南から）

写真図版 3



1. 1・2号溝（南から）



2. 2号溝遺物出土状況（北から）

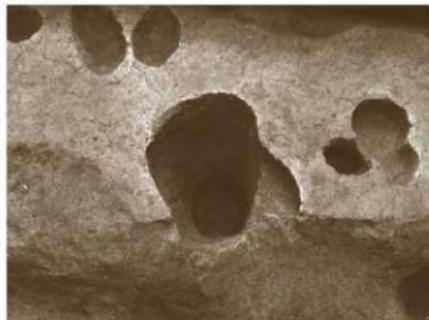


3. 3号溝（南から）



4. 3号溝全景（北から）

写真図版4



1. 18・19号土坑



2. 34号土坑遺物出土状況（西から）



3. 調査風景



4. 調査風景



5. 調査風景（小学校発掘体験）



6. 調査風景（小学校発掘体験）



1号住居址



1号溝



2号溝

1. 1号住居址、1・2号溝出土遺物

写真図版 6



3



4



5



6

2号溝



1



2



3



4

3号溝

1. 2・3号溝出土遺物



5



6

3号溝



1

19号土坑



1

34号土坑

1. 3号溝、19・34号土坑出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	さかのうえうばがみいせき だい2ちてん
書名	坂ノ上姥神遺跡 第2地点
副書名	南アルプス子どもの村小学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第27集
編著者名	斎藤秀樹
編著機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212 TEL055-282-7269
発行年月日	2011年3月30日

ふりがな	さかのうえうばがみいせき だい2ちてん	
所収遺跡	坂ノ上姥神遺跡 第2地点	
ふりがな	やまなしけんみなみあるぶすしとくなが 1717 ほか	
所在地	山梨県南アルプス市徳永 1717 他	
コード	市町村 遺跡	19208 HT-40 (南アルプス市遺跡番号)
北緯	北緯 35° 39' 16" (世界測地系)	
東経	東経 138° 29' 12" (世界測地系)	
標高	314 m	
調査期間	20090629 ~ 20090716	
調査面積	77.4 m ²	
調査原因	私立小学校建設工事	
種別	散布地	
主な時代	奈良・平安時代、中世	
主な遺構	竪穴住居址1軒(平安時代)・溝状遺構3条・土坑47基	
主な遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器、鍋、棒状鉄製品、獸骨、ウマの歯	
特記事項		

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第27集

山梨県南アルプス市

坂ノ上姥神遺跡 第2地点

南アルプス子どもの村小学校建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2011年3月30日

発行者 南アルプス市教育委員会

〒400-0492

山梨県南アルプス市鮎沢1212

TEL 055-282-7269

印刷所 鬼灯書籍株式会社

〒381-0012

長野県長野市柳原2133-5

TEL 026-244-0235

FAX 026-244-0210